昭和集団羞辱史

芸術編 ストリップ嬢 ヌードモデル

濠門長恭

巻頭言

すでに半世紀の昔。「もはや戦後ではない」と経済白書が宣言した昭和三十一年。所得倍増計画が発表された昭和三十五年。時代は高度経済成長に突入していた。

進学率が半数に達していなかった当時、停滞する一次産業地域の新卒者の多くは、急成長を続ける工業と商業へと、就職していった。地方から大都市へ新卒者を運ぶ『集団就職列車』が仕立てられたほどだった。

しかし。華やかで豊かな生活への憧れと希望とを胸に巣立つ若者たちばかりではなかった。意に染まぬものの、さまざまな事情で、性の汚濁に身を投げ込まざるを得なかった少年少女もいた。

このシリーズでは、高度経済成長の影で泣いた――主として少女たちの足跡を追ってみたいと思う。

なお、本シリーズでは、昭和三十年代に普通に使われていた名称を敢えて使い、現代風には書き換えない。トルコ風呂がソープランドに名前を変えるのは昭和六十年になってからであるし、昭和五十年代後半までニューハーフという言葉は知られていなかった。ビジネスガールは娼売女の意味を持たなかった。

時代劇の中で軍隊とか経済など、当時には無かった単語に違和感を覚えるのと同じ理由で、筆者は右の方針を採るものである。現代では差別語とされるものも（不自然でない言い替えが可能なものを除き）使用する場合がある。

本シリーズの設定は、作者の少年時代の記憶を土台にして、あるいは時間軸をずらし、またはネットで得た知識に基づいて想像や虚構を大幅に交えたものであるが、登場する人物・年齢・団体・地名などはすべてフィクションである。また特定の思想などを賛美もしくは誹謗するものでもない。

目次

巻頭言……1
目次……3
ストリップ嬢……5
花園一座……7
リハーサル……29
白鳥の湖……47
最初の壁……64
サドマゾ……78
恋愛未満……88
レズ熱演……96
開膜記念……110
ヌードモデル……116
職業強制……117
職住一体……122
裸婦写生……138
四十八手……141

緊縛教室　145
野外撮影　158
廃校利用　163
割勘凌辱　183
快感契約　197
後書きに替えて　211

ストリップ嬢

ストリップショーは、昭和二十二年に帝都座で大きなショーの中の一コマとして公開された『額縁ショー』を嚆矢とする。等身大の額縁の中で（股間を隠した）裸婦が名画と同じポーズを取り、暗転していた舞台に数秒間だけ照明を当てるという他愛のないものであった。これが大人気を博して、雨後の筍の如く全国各地に広まっていった。やがて、入浴シーンを見せる興行なども行なわれるようになり、じきに、踊りながら衣装を脱いでいくという形に落ち着いていった。

しかし乱立した劇場間の競争がやむことはなく、ショーは次第に過激になっていった。ただ全裸を見せるだけでなく、女性器を意図的に露出する『特出し』が始まり、ついには客の面前にしゃがみ込んで指で広げて見せる『御開帳』にまで発展した。

この物語で語られる時代の後には、ポラロイドフィルムを客に買わせて写真に撮らせる『ポラロイドショー』『撮影ショー』が普及した。プライベートに『御開帳』してもらう者もいれば、おとなしいアベック写真を愉しむ者もいた。

やがて昭和も末期になると、ステージ上で男優と本番行為をする『白黒ショー』も珍しくなくなり、ついには客をステージ上に招いて行為に及ぶ『本番まな板ショー』まで出現した。客も尻込みすることはなく、多数の希望者がジャンケンで踊り子の相手を決めるの

が普通だった。さすがに、こういった過激なショーは摘発されて、仇花の如く消えて行ったのだが。

現在ではストリップ劇場が次々と閉鎖されてゆく一方で、女性ファンも現われるなど、ニッチだが健全なショーと化している。

ストリップ＝女の裸＝卑猥と単純に考えられた昔を、筆者は懐かしく思う。

花園一座

舞台では全裸のリリー平塚が『かぶりつき』の客の鼻先に開脚してしゃがみ、尻から回した手で『御開帳』をしている。十秒もすると立ち上がって一メートルばかり移動して、同じ動作を繰り返す。そのたびに、正面の男たちから拍手が沸き起こる。二つ折りの紙幣を差し出す男もいる。リリーはいっそう屈んでそれを乳房の谷間で挟んで受け取り、網ストッキングに挟み込む。

舞台の袖からその様子を眺めている白川五十鈴の顔は、すこし青ざめている。

（できるだろうか……？）

リリーが引っ込めば、すぐ自分の番だ。素肌にチュチュとショーツだけをまとって踊り、最後には全裸で踊り、そして『御開帳』をする。同性に裸を見られるのさえ恥ずかしいのに……見知らぬ八十人もの男性の眼前で、ただ全裸になるだけでなく、もっとも隠さなければいけない部分まで自分の手で割り広げる。言葉にして考えると、身体が震えてくる。

（でも、やるんだ。やらなければ……）

一家が破滅する。

父の経営する工場が破綻して、一家は田舎へ逃げ帰った。自己破産をして家屋敷も家財

も没収されて、それでまともな銀行筋は諦めてくれたが、闇金融はしつこく返済を迫ってくる。遺産の先取りで実家の田畑を売るか、いっそ娘を売るか。

そんな苦境を救ってくれたのが、即日採用社だった。

トルコ嬢やホステスは身体を『売る』が、ヌードモデルやストリップ嬢は『見せる』だけでいい。バレエを踊れる子は少ないし、そういった業界ではバージンなんて天然記念物だ。きみなら、すぐにでも売れっ子になれる。そんな甘言に――釣られるしか、選択肢はなかった。

特別周旋課長の林が闇金融と（たぶんヤクザを介して）交渉して、強引な取り立てをやめさせてくれた恩も大きい。返済条件は、月に二万円の十年払い。大卒者の初任給が一万円ちょっと、中卒なら六千円の時代の二万円である。家で工面できるのは、どう頑張っても一万円。残る一万円は、五十鈴の華奢な双肩に乗せられた。

三月二十八日に、五十鈴は同郷の北野ユキと各駅停車の三つ先で合流した島本綾との三人で、即日採用社の山崎という若い男に引率されて、夜行列車で――都会の汚濁に身を投じた。それを理解しているから、箸が転げても笑う少女が三人もいて、まるで通夜のような旅行だった。

終着駅に降り立つ。別の線でほぼ同時刻に到着した汽車に乗っていた、今里という男に引率された五人と改札で合流した。八人のうち二人は、雇い先から人が迎えに来ていたので、その場で引き渡された。残りの六人は喫茶店でモーニングを食べさせてもらった。みんな、初めての体験だった。五十鈴だけはそのサービスを知っていたが、都会にいた頃は親に連れて行ってもらうにしても早過ぎる年齢だった。トーストに茹で卵に小さなサラダ。

そして、コーヒーの苦みを消すために何個も入れた角砂糖。体重を気にする年頃の少女たちには、じゅうぶんな食事だった。

そこで二人ずつの三組に分かれた。五十鈴は大芝加奈という二つ歳上の少女とともに、林課長に連れられて『就職先』へ向かった。

電車に乗り換えて、戦後に発展したいわゆる衛星都市のひとつで降りる。すこし歩くと、やたらと看板が派手なチマチマした建物が多い地区になった。その中であたりを圧倒するような大きな建物。東洋娯楽劇場の看板が目立つ。

花園一座来演

大きなポスターが貼られていて、三人の美女の似顔絵が描かれている。その下には芸名と演目。

花園美蝶（日舞）

花園美絵（姉妹レズビアン・ショー）

リリー平塚（洋舞）

五十鈴が首をかしげた。レズビアンという言葉も知らない初心な娘だった。

「こっちも面白いな」

林が、隣の細長いポスターを見て言う。

市川電蔵／若尾文子特別客演（剣劇）

ええっと、五十鈴も加奈も目をみはった。市川雷蔵と若尾文子。銀幕の大スターがストリップ劇場で共演するなんて、信じられない。

キャラキャラと、ポスターを指差して加奈が笑った。五十鈴もトリックに気づいて笑う。故郷を出て初めての笑いだった。ポスターをよく見ると――すこし崩した字体は雷蔵ではなく電蔵、若尾ではなく苦尾だった。笑いながらも、自分はこんないかがわしい世界に足を踏み入れるのだと、すこし悲しくなった。けれど、緊張がほぐれたのも事実だった。

通用口へまわって、加奈は外に待たせて二人で楽屋へ入ると、三人の男女が待ち受けていた。薄化粧の女性は、ポスターの花園美蝶にすこし似ていた。

「白川五十鈴さんをお連れしました」

林が五十鈴に向き直って、三人を紹介する。

「劇場の支配人さんと、座長の花園美蝶さん。こちらの人は、一座のマネージャーの本郷さん」

美蝶と紹介された女性は三十絡み。一見すると、中流家庭の上品な奥様。本郷のほうは、きちんとスーツを着て髪もなでつけているが、どことなく崩れた雰囲気を漂わせている。

「白川五十鈴です。よろしくお願いします」

お辞儀をしながら――マネージャーがいるなんて芸能界みたいだと、五十鈴は思った。

「いいねえ。可愛いねえ。初々しいねえ。今日からでも出演してもらいたいくらいだけど、うちでは出てくれないんだったね」

「まだ、まるきりのシロウトですから」

すぐにでも『仕事』をさせられるのかと思っていた五十鈴は、半分安心して半分不安になった。ぽっと出のシロウトが通用する世界ではなさそうだ。

「もう一人の子を待たせていますので、これで失礼致します」

即日採用社の特別周旋課長は、ソソクサかアタフタか、そんな様子で楽屋を出て行った。これで、五十鈴との縁は切れた。もしも再会することがあるとしたら、それは闇金融への返済が滞ったときだ。

支配人も仕事に戻って、楽屋には美蝶と本郷だけ。

「そこの椅子に掛けてちょうだい。話が長くなるから、壁に背をもたせてもいいわよ」

美蝶が背の低い丸椅子を指した。

五十鈴は大きな鞄を部屋の隅に置いて、そこに腰掛けた。本郷が冷蔵庫からコーラを取り出してコップに注ぎ分け、化粧台の横に置いた。田舎にいた二年間、一度も見掛けなかったハイカラな飲み物。雑踏よりもずっと、都会に戻って来た実感が湧いた。

そしてようやく。楽屋の様子が意識に留まるようになってきた。両側の壁に小さな化粧台が三つずつ並んでいて、色使いの派手な衣装があちこちに掛けられている。香水や白粉の匂いがあふれている。如何にもな女の園だった。

「まず、金の話から始めよう」

本郷が五十鈴と向かい合って丸椅子に座り、口を開いた。美蝶は化粧台の前で婦人雑誌を読んでいる。

本郷の説明によると――出演料は格（人気）にもよるが、一日四回の舞台で千円前後。公演は一週間から十日くらいで、月に二か所での公演が普通。月額でみれば二万円ほどだが、花園一座が拠点にしているモダン・ミュージックシアターでの公演は月イチで、それ以外は汽車賃も宿代も自腹になる。マネージャーの給料も、稼ぎに応じて負担しなければならない。

「ズルをしてる子もいるが、うちは揚げ足を取られないように、税金も保険もきっちり払っている」
稼ぎの二割はお国に持っていかれる。しかも華やかな舞台衣装も、踊りに使う音楽のレコードもすべて自前。どんなに遣り繰りしても、月に五千円とは残らない。
「……」
騙されたと思った。月に一万円の返済どころか、売れっ子になれば繰り上げ返済も夢ではない――所詮は、口入屋の出まかせだった。
そんな五十鈴の表情を読んで、本郷がニヤリと笑った。
「と、まあ。ここまでは税務署向けの話でな」
それこそ人気次第だが、『おひねり』が馬鹿にならないどころか。
「座長なんか、百円札のレイ――首飾りだな、それをもらったことだってあるぜ」
楽屋の中にはやたらと縫いぐるみが飾られているが、これもファンからのプレゼントだという。縫いぐるみや花束、ライバルの（太らせてやろうという）謀略かと疑うような、ケーキ類の差し入れ。
「金にはならないが、縫いぐるみは年末にまとめて孤児院に寄付して、まあちょいとした慈善事業だな」
「おはようございまーす」
美蝶より若い――二十代後半くらいの女性が、元気よく飛び込んで来た。
「え……ああ、新人さんね。おれっちは、リリー平塚てんだ。あんたは？」
「それなんだけどね」

美蝶が婦人雑誌を置いて顔を上げた。
「白鳥麗華なんて、どうだろうね。いかにもバレエを習ってるお嬢様ぽいだろ」
それで、いい？　尋ねられて、芸名のことだと五十鈴は気づいた。美蝶、美絵、リリー。みんな本名にしては華々しい。ますます芸能界だ。
それでいいです――と答えかけて。
「素敵な名前です。ありがとうございます」
それくらいの受け答えはできる五十鈴だった。
「できるだけ本名は隠しといたほうがいいよ。あっちこっと根掘り葉掘りして、本籍地まで突き留めちまうやつだっているんだから」
まさか親元にファンレターを書くはずもないだろうと、それくらいは五十鈴にもわかる。芸能界どころか、他人様に後ろ指をさされる職業なのだと、五十鈴はまた気落ちした。
「仕事の手順なんかは、百聞は一見に如かずってやつで、今日の公演を見ればわかることだが。演出も振り付けも、自分で工夫するんだぜ。もちろん、俺たちも知恵を絞ってやるが……バレエなんて高尚なシロモノとは縁がないからなあ」
「聞き捨てならないね、一雄。日本舞踊は高尚じゃないってえのかい？」
「どうせ、ロックンロールもツイストも、労働者階級の踊りだもんな」
十字砲火を浴びて、本郷は無条件降伏。
「すまねえ。盆踊りだって満足に踊れねえんだから、勘弁してくれよ」
二人に土下座して――謝っているようには見えないのだが。
「開演まで時間はあるな。昼飯を食いに行こう。おごってやるよ」

「ありがとうございます」
稼げるようになったら、この人の給料の何割かはわたしも出す。それを思うと、なんだか奇妙な気分になる五十鈴だった。

夜は一杯飲み屋になる店で（本郷が二人分を注文して）野菜炒め定食を食べて、劇場に戻ると楽屋ではなく舞台から一番遠い場所にある二階の照明室へ連れて行かれた。
「ちょいとお邪魔するぜ。新人の見学だ」
五十絡みのしょぼくれた親父に本郷が声を掛ける。
「白川……白鳥麗華です。お邪魔します」
「へえええええええ」
親父が目を丸くした。
「ずいぶんと若いねえ。歳は幾つ」
「申年の生まれだから、十八歳ちょうどだね。誕生日が過ぎたら、酉年になるかもしれないが」
本郷が五十鈴を振り返って、洋画みたいなウインクをした。
そうか。自分はこういう仕事をしてはいけないんだな――と、五十鈴は後ろめたい思いをいっそうつのらせた。
「まあ、本音と建て前ってやつだよ」
これは、はっきりと五十鈴に向かって言っている。
「御上がその気になりゃ、みんな公然猥褻罪でしょっ引かれる。しかし建前としては、激

しく踊っているうちに衣装が脱げてしまったという、不可抗力の事故ってやつだ。賭博が禁止されてるのに、パチンコじゃ堂々と換金している。世の中、そんなものさ」

だから麗華が嘘とわかりきっている年齢を申告しても、窃盗だの覚醒剤だのの余罪でもないかぎり、御上も目をつむってくれる。

「就職したばかりの子に深夜まで残業させたりマグロ漁船に乗せたり、それと同じさ。法律を四角定規に守ってヤミ米に手を出さず飢え死にしたのは、日本中でたった一人だったじゃねえか」

本郷の言いたいことは、わかる。けれど――破産した父に、法の裏を掻いてしつこく返済を迫る闇金融も、本郷の論法だと正当化されるのではないだろうか。

五十鈴の迷いは、ブザーの音で中断された。

「まもなく開演です。踊り子の衣装や身体にはお手を触れませぬよう、お客様にお願い申し上げます」

ゆっくりした音楽が鳴り始めて、場内の照明が薄くなった。舞台の手前に吊るされたミラーボールに光が当たって、色とりどりの光点がゆっくりと館内を流れ始める。

「ちょっと遠いが、ここからなら観客と同じ視点で見学できる。観客の反応もわかるしな」

自分を育てようとしてくれているんだなと、五十鈴は思った。法律がどうであっても、自分は一座の期待に応えて一人前のストリップ嬢になり、うんと稼いで一家を支えなければならないのだ。

カッポーン。鼓の音とともに、邦楽に切り替わった。

舞台の右手から、きらびやかな和服に身を包んだ美蝶がスポットライトを浴びて登場す

る。ポスターにそっくりの和風美人に化けている――といっては失礼だと、五十鈴は思ったが。それほどの変貌ぶりだった。

美蝶が箏曲に合わせて緩やかに舞う。

（まあ……？！）

美蝶の踊りは優雅で、素晴らしく洗練されていた。

五十鈴には日舞の素養はない。けれど、友達のおさらい会に招待されて、その流派の御師匠さんの踊りを観たことは何度かあった。その御師匠さんよりも、足の運びはずっとメリハリがあって、腕の動きはずっとたおやかだった。

これほどの技量を持った人が、なんでストリップなんかを――五十鈴には、ストリップは賤業だという意識があった。

やがて。美蝶は踊りながら帯をほどいた。いや、自然とほどけたように見えた。

着物も、するすると肌から滑り落ちた。

襦袢姿で踊っているうちに、それも滑り落ちて。最後には腰巻も脱げて、素裸になった。

「な……きっちりと同じ場所に固まってるだろ」

後で回収しやすいように、そして観客の視線から隠れるように、計算して脱いでいるのだと本郷が教えた。

美蝶が舞台中央から延びる花道に進んで、扇子一本で微妙なところを隠すような隠さないようなしぐさで踊り続ける。その先に、小さな円形の舞台があった。そこで足の運びを止めて身体を沈めていき、横臥した。

「わ……」

五十鈴が小さく叫んだ。
「シイッ」
本郷が耳元でささやく。
（回ってる……）
五十鈴は心の中だけでつぶやいた。
円形の舞台がゆっくりと回転していた。その上で、美蝶は身体をくねらせ、物憂げに脚を動かしている。縦と横の違いはあるが、バレエの動きにも似ていた。白い肌をミラーボールの光点が艶めかしく這う。
それが五分ほども続いただろうか。
回転舞台が止まって、美蝶が身体を起こした。
「絶対に声を出すなよ」
耳元で念押しされた。
美蝶はしゃがんだ姿になって、両脚を大きく開いた。
（……！）
五十鈴は両手で口を押えた。
美蝶が左手で身体を支えて腰を突き出して。右手を股間に持っていって、人差し指と中指をV字形に開いた。五十鈴からも、女性器の奥まで直視できる。
こんな仕種を『偶然の事故』だなんて強弁できるんだろうか。
「これを『御開帳』あるいは『特出し』とも『オープン』ともいう。客は、これが目当てでやってくる」

細かいことをいえば、女性器を見せる行為全般を『特出し』と称し、そこを指で広げて客に見せつける仕種を『御開帳』あるいは『オープン』と呼ぶのだが。『特出し』だけですませていたのは、地方にもよるが昭和二十年代中頃までだった。

それはともかく。付いているモノは誰も似たようなものだから、ショーの部分が不出来だとすぐに飽きられてしまう。

自分にも当てはまることだと、五十鈴は察した。若い処女の女性器は珍しがられるだろうが、バレエが下手くそだと、二度三度と見に来てもらえない。花園姉妹にもリリーにも、公演のたびに、もっと熱心だと何回も見に来てくれるファンがいるという。

それを聞いて五十鈴は、いっそうの不安をつのらせた。だってバレエを習っていたのは、家が裕福な小学校時代だけだった。いわば学芸会のレベルで、お客に満足してもらえるとは思えない。

客のひとりが、二つ折りにして紙幣を差し出した。美蝶は『御開帳』をしたまま身を乗り出して左手で受け取ると、細くたたんで足袋の縁に差し込んでから指にキスをして、それを客の唇に軽く触れた。

立ち上がって回転舞台を六十度くらい移動して『御開帳』を繰り返す。

一周すると、花道を引き返しながら左右の客席に均等に御開帳していく。

最後に舞台の右端から左端まで。美蝶の足首はくすんだ色の花びらで埋まっている。

「十円札がほとんどだが、百円札も珍しくない。な、稼げるだろ」

これまで想像したこともない世界に気を呑まれているうちに、つぎのショーが始まった。美蝶とは打って変わって、アップテンポでモダンな洋楽。五十鈴には、ジャズとロックの

違いはわからない。
舞台の右手からリリーが駆け出た。頭には大きな赤いリボン。青色のブラウスのボタンをはずして裾をヘソの上で結んでいる。まるでブルマのような、しかし身体に貼り付いたショートパンツも青色。そして、踵の高いまっ赤なサンダル。とても街中を歩けないようなきわどい衣装だった。
リリーが舞台中央でポーズを決める。左脚を後ろに引いて右脚を曲げ、腰を突き出し胸を反らせて、のけぞった頭に右手、腰に左手。
つぎの小節で左脚を頭の高さまで跳ね上げて、激しく踊りだした。
激しくて、そしてセクシーだと五十鈴にもわかる。足を横に蹴りながら左右にステップして、腰をくねらせながら身体を伸縮させて。高く跳び上がって、着地の反動を利用してピルエットよりも高速に何回転もする。すくなくとも五十鈴の技量では真似のできない動きだった。
踊りながら、リリーが衣装を脱いでいく。ブラウスを脱いでブラジャーを投げて。高く跳んでショートパンツを蹴り飛ばした。
「笑ってる……」
男に裸を見せることが愉しくて仕方がない――そんな印象を受けた。
「いいとこに気づいたな」
本郷がささやく。
「乙女の恥じらいたっぷりに脱いでくってのも、風情がある。いちばんいけないのは、厭々やっていると顔に出しちまうことだ。もちろん、ぶすっとしてちゃあ話にならない」

羞じらいながら脱ぐのなら、自分にもできるかもしれないと、五十鈴は思う。
リリーはパンティを脱いで、それは蹴り飛ばさなかった。８の字に折りたたんで足ぐりを重ね、右の太腿に穿きなおした。
踊りが緩やかになると、公園にあるようなベンチを劇場の従業員が二人がかりで運んで円形舞台の縁に置いた。
音楽がスローテンポなものに切り替わって。
踊り疲れたといった風情で、網ストッキング（だけ）姿のリリーがベンチに浅く腰かけて――男でもしないくらいに脚を大きく開いた。
音楽は、ゆっくりとしたトランペットのソロに変わっている。リリーの左手が乳房を揉み始めた。右手が腹を滑り落ちて、ハート形に整えられた淫毛を指で掻き分けて――中指が浅く淫裂を穿った。
わざと見えにくくして、お客を焦らしているのだろうか。そんなふうに、五十鈴は思ったのだが。
「あれは、まったくの演技だぜ。その証拠に豆は弄ってねえだろ」
「……？？」
五十鈴には、本郷の言っていることがさっぱりわからない。のを、本郷が見て取って。
「麗華ちゃんは、ああいう『おいた』をしたことはないのかな？」
「オイタ……？」
本郷が溜め息をついた。
「まあ、いいや。今夜あたり座長――よか、リリーがいいか。教えさせるさ」

回転するベンチの上で、リリーが苦しそうに（と、五十鈴には見える）身をよじって、頭をのけぞらせ……ベンチとともにあお向けに倒れた。そのまま後ろへデングリ返しで立ち上がる。ベンチのあった場所が空いて、『御開帳』をする場所ができた。すべて計算された演出だと、五十鈴にもわかった。

その『御開帳』も、美蝶とはずいぶんと様子が違った。最後にすることは同じだが、客の前に仁王立ちになって、後ろからまわした手で淫唇をくつろげながら、拍手に包まれて腰を落としていく。

正面の客が、二つ折りにした紙幣を突き出した。リリーは身をかがめて、男の手を乳房の間に挟み、二の腕で乳房を寄せて身を起こす。客の手が引き抜かれて、紙幣だけが残った。それを太腿に巻いているガーターリング（ストッキング留め）に挟んだ。

「踊り子に手を触れるのは御法度だが、踊り子が触らせるのはかまわないのさ」

そのせいか、回転舞台をひと巡りしただけで、ガーターリングの紙幣は満開になった。花道でもらった紙幣は、右の腿に穿いているパンティに押し込んだ。

「いつもいつも、あそこまで触らせたりはしねえよ。ストリッパーになるなら、これくらいは頑張れってえ、麗華ちゃんへの激励てえか、お手本のつもりだろうさ」

五十鈴は、そっと唇を噛んだ。とても真似できない。恥ずかしいとかいう以前に、五十鈴のささやかな乳房では、あんな芸当は不可能だった。もしも自分が『おひねり』をもらったら、どんなふうに受け取ろうか。そんなことを考えたのだから、リリーの教育は効果があったというべきだろう。

三番手は、銀幕の偽スター・コンビだった。

舞台の奥で赤い幕が左右に分かれて――白い後吊幕を背景に、ぽつんとハリボテの松が置かれていた。一週間ほどで出演者が替わるし、演目も出演者の数だけある。そして、観客は五十人そこそこ。そうは大道具にお金を掛けられないのだろう。そこまで考えて、座席の配置が映画館などとはまるきり違うことに気づいた。舞台のかぶりつきと花道と円形舞台の周囲。そこにしか座席が設けられていない。

五十鈴みたいに遠くから眺めるだけで満足するお客なんていないのだ。

低く流れていた流行歌が途絶えた。

カッポーン。美蝶のときと同じ小鼓の音。レコードではなく、隣の音調室で実際に鳴らしているらしい。

舞台の左手から武士が登場する。着流し姿で右手を懐に入れている。身を持ち崩した浪人という設定だろう。

ドロドロドロドロ。太鼓の音とともに、右手から武家娘が登場。白装束に白鉢巻。この格好だけで、仇討ちのチャンバラが始まるとわかる。

鉦に小鼓に笛の急調子の邦楽が流れる。

「父の仇。覚悟！」

へえ――と、五十鈴は軽く驚いた。映画だと、女性は必ず懐剣で男の大刀に立ち向かう。しかし苦江文子は短めの刀を右手に構えて半身になっている。

「しゃらくさい。返り討ちにしてくれるわ」

市川電蔵も抜刀して、上段に構えた。

文子が左手を柄頭に添えて突きかかる。電蔵がヒラリと体をかわして、つんのめった文

子の背中に斬りつける。のを、文子が床を転がって逃れる。
「……」
凄まじい迫力に、五十鈴は息を呑んでいる。チャンバラ映画だと、主人公は何十人もの敵をバッタバッタと斬り倒す。嘘っぽく見えるのだが。この二人のチャンバラいや剣戟は、ほんとうの斬り合いとはこうだったのではないかと思わせる。
「これで演技力が伴ってれば、二人ともひとかどの時代劇俳優になれてたんだがなあ」
本郷の言葉の意味は、じきにわかった。
ギャリイン――という音は聞こえなかったが。文子の刀が宙に弾き跳ばされた。電蔵の返す刀が、文子の着物を切り裂いた。のは、仕掛けがあるのだろうが。
切り裂かれた着物が邪魔とばかりに、文子が諸肌を脱いだ。女博徒が鉄火場で啖呵を切っている様子を彷彿とさせた。貞節な武家娘にはふさわしくない仕種だった。
文子は花道を追い詰められながらさらに数合の斬り合いで、腰巻一枚になり、それも斬り落とされた。
円形舞台の上で文子が組み伏せられる。電蔵が素早く着物を脱いで六尺褌一本の姿になった。電蔵があお向けの文子の脚の間に腰を押し入れて、ヘコヘコと動かす。
（きゃ……）
いかに初心な五十鈴でも、その仕種の意味くらいは（おぼろに）わかる。真似事とはいえ、男女の交わりを演じて見せるなんて、とんでもないことだというのが、彼女の感覚だった。
回る舞台の上で、二人はつぎつぎと絡み合いの形を変えた。仰臥した文子の両脚を高く

持ち上げる。四つん這いになった文子に電蔵がおおいかぶさる。文子が手足を突っ張って尻を高く持ち上げる。反対向きに横臥して脚を絡ませ股間を打ちつけ合う。座ったまま抱き合う。ついには、電蔵のほうが仰臥して文子が馬乗りになる。そのあいだ、ずっと二人は腰を上下左右に打ち振っていた。

回転舞台が止まると電蔵は客席の手前に降りて、自分と文子の着物をまとめると、身を屈めて逃げ去った。

あとは文子のひとり舞台。『御開帳』だが、差し出される紙幣は数枚だけだった。

「浪人が一方的に武家娘を凌辱して悠然と立ち去る。せめて、それくらいの演出にすれば全体の辻褄が合うんだがなあ」

本郷が嘆息ともなくつぶやいた。いや、五十鈴に演出の大切さを教えようとしているのかもしれない。

「教えてあげないんですか」

「聞く耳、持たねえよ。四十八手を披露するのが楽しくて仕方ないのさ」

四十八手の意味が、なんとなくわかった。今のように女性が積極的に動く場面があっては、本郷のいうような演出にはできないだろう。

「好きじゃなきゃやってられない商売だが。客受けも考えなきゃ干上がっちまう」

そこで本郷は独り言を装うのはやめて、五十鈴の目を覗き込んだ。

「まあ、そういうのを考えるのは初舞台を踏んで度胸がついてからのことだが。頭の隅にとどめとくのと何も考えないのとでは、先行きが違ってくるぜ。柄にもなく説教じみちまってご免よ」

「いえ……ありがとうございます」
本郷が、照れたように舞台へ目を戻した。
――舞台が暗転した。五十鈴もしばしば耳にしている流行の演歌が掛かった。スポットライトが二つ、舞台の右と左に当てられた。
その光の中に、まったく同じ衣装を着けた二人の美蝶が、緩やかに踊りながら登場した。どちらかが本物の美蝶で、もう一人は、五十鈴がまだ顔を合わせていない妹の美絵に違いない。
二人は向かい合って、まるで合わせ鏡のように同じ振り付けで近づいて――二人並んで正面を向いたときには、まったく同じ動きになっていた。客席から拍手が湧いた。衣装を着けたまま踊っているときに拍手が起きたのは、これが初めてだった。
向かい合うと合わせ鏡になって、並ぶと同じ振り付けになっている。
息の合った踊りは、いつまで見ていても飽きない。だからなのか、衣装のままの踊りがこれまでより長く続いた。
そうして。脱ぎ始めると、初めて対称が破れた。脱ぐのではなく、互いに脱がしていく。一方が相手の帯を解くと、解かれたほうが帯を解くだけでなく着物まで脱がせる。そうやって時間を掛けて腰巻姿になって。腰巻を相手から剥ぎ取ると、ほとんど背中と背中とをくっつけるようにして、腰巻をヒラヒラと操りながら股間を隠したり見せつけたり。
また拍手が沸いて。白い小さな紙礫のような物が幾つも舞台に投げられた。礫とちがって、長い尻尾が着いている。
「あれが本来の『おひねり』だぜ。数は多いが、せいぜい十円玉だから額は知れてる」

間接キッスとか胸を触らせてもらうといった見返りがないのだから、これは二人の踊りに対する純粋のご祝儀だ。
「どっちも『おひねり』じゃややこしいから、リリーなんかは御開帳のときのをチップと言ってるな」
花道では時間を掛けずに、二人が円形舞台に乗った。背中合わせをクルリと向き直って。
「う……」
叫びかけて、五十鈴は慌てて自分の口を押えた。
二人は抱き合って、キスをしている。
（女同士でキスだなんて……あれ？）
ポスターに『姉妹』と書いてあったのを思い出した。姉と妹で濃厚なキス。五十鈴は、カアッと顔が熱くなった。電蔵と文子のときは、あまりにも自分から懸け離れた出来事だったので、ただポカンとしていただけだが。女同士となると、自分に引き付けて考えることができた。しかも、美蝶とは会って話をしたばかりだった。
演歌は終わって、ゆったりとした雅楽に変わっている。
二人は舞台に腰巻を敷いて、絡み合ったまま、そこに身を横たえた。
互いに相手の胸を揉み、股間に手を這わせ……電蔵は褌を締めていたが、美蝶も美絵も素裸だ。真似事ではなく、ほんとうに女同士で睦み合っている。
そのうち、横向きになったまま一方がずるずると下がって行って。
「きゃっ……」
今度は、驚きの声を封じられなかった。

ずり下がったほうが、相手の股間に顔を埋めたのだ。そこを舐めていると、はっきりわかる仕種を繰り返して……舐められているほうは腰をなまめかしくくねらせ始めた。
スポットライトは、もう裸身を照らしていない。薄暗い照明にほんのりと浮かび上がるもつれ合った白い裸身の上を、ミラーボールの光点が流れていく。幻想的ともいえる、エロチックな光景だった。
「これが、一座の売りさ。レズビアン・ショーは珍しくもないが、実の姉妹でとなると、背徳的で淫靡で、客の食いつきが違う」
五十鈴は舞台の上の卑猥だが美しい光景に目を奪われていて、本郷の声は耳を素通りしている。
一方的に舐められていたほうが、腰を中心にくるんと向きを変えて――同じように股間に顔を埋めた。
しばらくすると、二人が互いにずり下がって、脚と脚を絡ませて、股間同士をくっつけた。くっつけて、すり合わせる。二人とも顔をのけぞらせて目を閉じ口を半開きにして、忘我の境をさまよっているように見えた。
五十鈴は、リリーがベンチでしていた仕種を思い出した。あれとこれとは、なにか関係があるらしいと――漠とした理解が生じかけていた。
いったいに、どれほどの時間が経過したのか。二人は向かい合って股間を押しつけ合ったまま、高く腰を持ち上げて――相互にブリッジで支え合うような形で、十秒ほども静止していた。
そのブリッジがペシャッと崩れて。二人が物憂げに身体を起こした。

情事――という単語が、五十鈴の頭に浮かんだ。無垢な少女にそれを想起させるほど、姉妹の絡みは濃厚だったのだ。電蔵と文子のコンビとの違いが、なんとなくわかるような気がした。姉妹はコンビほどではないにしても、あれこれと『形』を変えていたが、気がつくといつのまにかそうなっていたという自然さがあった。

二人は『御開帳』で、これまで以上のチップを掻き集めた。いつの間にか舞台に幕が下りていたのは、第一回目の公演が終わったという意味だが、姉妹が左右に分かれて舞台から姿を消すと、すぐに上げられて――紙礫の『おひねり』はきれいに片付けられている。

五十鈴の感覚にしてみれば、あっという間に二時間が過ぎていた。

第二回目の公演までの休憩時間は十五分。過半数の客は席を立ったが、花道やかぶりつきから円形舞台前の席に移動する者も少なくなかった。一日四回の公演でも、客の延べ人数は百三十人くらいがここの劇場の実績だと本郷が説明してくれた。

入場料は封切館（映画）の四倍の三百円だが、定員数が少ないから、単純な掛け算だとそれほど旨味のある商売ではない。

「もっとも、こっちはよほど不人気な踊り子ばかり揃えたりしなけりゃ、閑古鳥が鳴くこたあない」

地元の親分への挨拶や所轄署への陣中見舞いを差し引いても、結局は映画館より儲かるのだと本郷が教えてくれた。

業界の裏も表も、手の内をすべて曝して――五十鈴に覚悟を決めさせようという腹積もりなのかもしれなかった。

リハーサル

二回目の公演は舞台の袖から見学して。終わると、午後五時をまわっていた。今度は本郷と美絵の二人に連れられて、昼と同じ店で夕食を食べた。毎回おごってもらうのは悪いと思って、当座の生活費は親が工面してくれていたので、そこから払おうとしたら、たしなめられた。

「デビューまでは、食事と宿代くらいは一座で面倒みてあげるよ。けど、それ以外は一座からの貸しだからね」

五十鈴がきょとんとしていると、きちんと考えれば当然だが、五十鈴のそのときの気持ちからしたら、とんでもないことを言われた。

バレエ衣装一式と、踊りに使う曲のレコードは自前でそろえなければならない。五十鈴の財布にあるお金で追いつく額ではなかった。

「そんな情けない顔をするんじゃないわよ。舞台を見てたでしょ。すぐに取り返せるよ」

電蔵と文子のコンビへの『おひねり』がすごく少なかったところも見ている。五十鈴は、ますます不安になった。

不安を抱えたまま、本郷の案内で一座が使っている木賃宿へ行った。荷物は、一座の皆もしているように楽屋へ置きっぱなしにした。宿代の節約で、本郷が楽屋に泊まるのだそ

うだ。
三人が（今夜からは四人で）雑魚寝している大部屋へひとり取り残されて。
五十鈴は、頭を抱え込んだ。
衣装を着て五分ちかくも踊らなければならない。ところが、五十鈴の踊れるソロは一分半の『キューピッド』だけだった。あとは、群舞の単調な踊りだけ。それよりも――踊りながらチュチュを脱ぐなんて、できそうもない。タイツやショーツはともかく、レオタードも難しい。
『御開帳』をする勇気があるかどうかのずっと手前で、五十鈴は行き詰まってしまった。それでも、五十鈴はくじけなかった。くじければ、一家が破滅する。あれもこれも考えるから、頭がこんぐらかる。まずは、五分を踊りきる方策だけを考えよう。
――今日の一日だけで学校生活一年分以上のあれこれを詰め込まれた混乱や、この世界で稼げるだろうかという不安よりも、夜行列車の疲れのほうが勝っていたらしい。座敷机に突っ伏した姿勢で眠り込んでしまった。
「麗華ちゃん、寝てるのかい？」
さすがに眠りは浅く、パッと身体を起こした。
本郷だった。
「もうすぐ、舞台がハネる。みんなで銭湯へ行くけど、麗華ちゃんも来るか？」
木賃宿には内風呂がないという。旅の汚れを残したまま明日を迎えるのは、女の子として恥ずかしい。
「行きます。でも、石けんとかが……」

「銭湯で使い切りのやつを売ってるぜ」
麗華は下着の替えと手拭いと財布（つまり、所持品の全部）を持って、宿を出た。
劇場のある街区は、昼と様変わりしていた。昼間はごちゃついて見えた看板がライトアップされて、さまざまな原色に輝き、街灯から街灯に張り巡らされたモールでも豆電球が点滅している。その様を五十鈴は美しいとは思わなかったが、煌びやかではあった。
劇場の手前を裏路地へ折れてしばらく行くと、すぐにふつうの街並に立ち戻って、その先に背の高い煙突が見えた。
「ちと早かったかな」
腕時計を見て、本郷が言う。
銭湯の前で一座を待ちながら、五十鈴は行き詰まりを打ち明けた。
「明日の午前に、レコードと衣装を買いに連れてってやる。まずは現物を見てからの話だ」
こんな街でも、探せばバレエ衣装専門店もあるんだなと付け加える。
「バレエ教室なんざ、広告を出してるのだけで三つあったぜ」
電話帳を総当たりしてくれたらしい。
そうこうするうちに一座の三人と偽スター・コンビが連れ立ってやって来た。
女湯は、それなりに混み合っていた。男湯は静まり返っている。
掛け湯をして、下半身はざっと手で洗ってから湯に浸かろうとすると、リリーに引き留められた。
「もっときちんと洗えよ。こんなふうに……」
リリーは洗い桶をひっくり返して(女湯に腰掛けは置かれていない)、脚を開いて座った。

大淫唇をくつろげて、中に指を突っ込んでこする。さらに小淫唇の中まで指を挿れた。
「豆も、ちゃんと剥いて洗えよ」
淫裂の頂点にある突起を二本の指で挟んで、にゅるんと皮を剥いて、そこも軽くしごいた。
「おれらは、ここを見せるんだ。薄汚れた顔で人前に出られないのと同じさ」
なるほどとは思うが、軽い驚きを覚えたのも事実だった。
壁の鏡に向かい合って、リリーの仕種を真似てみた。指先に、硬い豆腐のような白い垢がびっしりと付着した。
「若い子は恥ずかしがって、ろくに洗わねえんだよな」
さらに指を進めて――つぷっと穴に指が嵌ると同時に、鋭い痛みを感じた。
「……！」
引き抜いた指先を見ると、血は着いていなかった。
学校の純潔教育では教わらなかったが、女子同士の『ちょっとエッチな内緒話』で、処女膜というものがあるらしいとは知っている。男性と初めて結ばれるときは、それが破れて出血する。自分の指で破ってしまっては、純潔の証しが立てられない――と、そこまで考えて。そこを見知らぬ男どもに開陳してお金を稼ごうとしている自分に、純潔なんてあるんだろうかと、悲しくなった。
けれど。みんなアッケラカンとしてそこを丹念に洗っている。自分ひとりが悲劇ぶっていても始まらない。気を取り直して、最後の一か所を洗いにかかった。
おっかなびっくりで、生まれて初めてそこを意識してつまんで。

「ひゃうんっ……！」
裏返った悲鳴をこぼしてしまった。小さな電撃が、そこを突き抜けた。痛いのではなく、むしろ甘かった。
「そういえば、オイタをしたことがないんだってね」
リリーが、五十鈴の背中におおいかぶさってきた。豊満な乳房が、五十鈴の背中に押しつけられる。
「……」
くすぐったいのと、なんとはなしの禁忌感に五十鈴が戸惑っているうちに。リリーの左手が突起をつまんだ。
クニックニックニッとしごかれて。中で何かが蠢く感覚が生じた。そして、さっきの小さな電撃が、より大きく続けざまに股間を突き抜けた。
「ひゃんっ……んんん」
驚きの声が鼻に抜けた。
リリーは、すぐに身体を離した。
「これがオイタの初歩さ。穴の中で感じるのとは一味違う気持ち良さなんだよな。お手軽だし、男はいらねえし。けど、病みつきになるなよ」
穴の中云々は理解の外だが、最後のところはよくわかった。ものすごく気持ちが良かった。そして――この行為が感覚が、男女の交わりと密接に関係しているらしいとも、おぼろに理解したのだった。
とにかくも。五十鈴は気持ちを切り替えて、そこを洗いにかかった。リリーとは違って、

簡単には剥き下げられなかった。おかげで、何度も小さな電撃を受けてしまった。苦労して剥いたそこには、豆粒ほどの肉塊があった。白い垢にまみれていた。そこが電撃の震源地だとわかってきたので、指でこすったりはせず、湯で丹念に洗い流した。

湯に浸かってから身体を洗い始めて。その手がすぐに止まった。

リリーが洗面桶に腰掛けて、今度は腋毛を剃り始めたのだった。

この時代、腋毛は生やしていて当然のものだった。ノースリーブで吊革につかまる女性も珍しくはなかった。むしろ、有るべきはずの物が無いほうが不自然だと考えられていた。とはいえ、男の内心がどうであったかは、別の問題ではあるが。

五十鈴の視線に気づいて、リリーが振り返った。

「アメリカあたりじゃ、これが常識さ。おれっちはバタ臭さを売りにしてっからな」

「麗華ちゃんも、そこは薄くしといたほうがいいよ」

美蝶が横合いから割り込んだ。

「バレエだって洋物だし。初々しさが当面の売りだからね」

「……」

五十鈴は自分の腋に手を差し入れてみた。ジャリジャリしている。

「今度から、そうします」

五十鈴は素直に答えた。

髪を洗っていると。腋を剃り終えたリリーが、今度は股間の毛を剃り始めた。小さな逆ハート形に生えている周辺を丹念に整えている。

「これも、道具の手入れさ。髪ボウボウじゃ人前に出られねえだろ」

「……」

言われてみると、そうかと思う。学生だった五十鈴には、まだその習慣はないが。オトナの女性は眉を整え、人によっては顔のムダ毛を剃り、きちんとお化粧をする。それと同じことなのだろう。

「麗華は、そのままでいいかな」

無遠慮に股間を覗き込んで、リリーが言う。

「変に形を整えると、初々しさが消えちまう」

リリーも美蝶も、そんなに声は落としていない。けれど、ほかの入浴客は振り返りもしない。繁華街で深夜に入浴する女性だから、いわゆる堅気ではない。触られたり触ったり、突っ込ませる者もいる――とは、五十鈴は知らないが。

――銭湯を出ると、苦尾文子は一座と別れた。別の宿を取っているのだと、美蝶が教えてくれた。

「木賃宿じゃ、お祭りの声が漏れちまうからね」

文脈から、お祭りというのが男女の秘め事だとは、五十鈴にも察せられた。

夜が遅い商売だから、電車が超満員になる頃合いにも一座の三人は眠りこけている。

枕元で（宿に備え付けの）目覚まし時計が鳴って、五十鈴だけが目を覚ます。午前十時にセットし直して、布団から出た。

朝の支度をして、広い台所へ行った。そこが、宿の食堂を兼ねている。木賃宿とはいうが、別料金で食事も供してくれる。いくら巡業とはいえ、モーニングセットと店屋物ばか

りでは、栄養が偏る。
台所の隅に、本郷がいた。手持無沙汰に新聞を読んでいる。
食卓には誰もいない。こういった宿を利用するのは、定額で支給される経費を浮かそうとする出張中のサラリーマンや、流れの職人が多い。いずれにしても、とっくに仕事に出ている時刻だった。
「鍋の中は四人分だそうだ。適当に取れよ」
五十鈴は遠慮して、ご飯も味噌汁も漬物も、五分の一ほども取らなかった。生卵は一つと、海苔も小分け袋をひとつ。
待たせている申しわけなさで、大急ぎで平らげて（喉につかえて胸が痛くなった）――本郷について宿を出た。

最初に行ったのはレコード店だった。クラシックもジャズも流行歌もそろっていた。
『ドン・キホーテ』というバレエ音楽を探しているのですけど」
「ああ、これね」
店主が探し出してくれたのはシュトラウス作曲の交響楽で、まるきり違っていた。
「これにしちゃ、どうだい。芸名にぴったりだぜ」
本郷が、『白鳥の湖』を抜き出した。
「座長もリリーも、同じ曲でいろいろと踊ってただろ。この曲にはこの振り付けってわけでもなかろうさ」
そうかもしれない。けれど、すこしでもうまく踊るには、馴染んでいる曲を使いたかっ

た。五十鈴が迷っていると。
「そんじゃ、これは俺からのプレゼントってことで、別勘定だ」
本郷が、さっさと買ってしまった。
レコードは別の店で探すことにして、次に行ったのがバレエ用品の専門店。
ここでも、五十鈴の思惑と本郷の意見とが食い違った。
五十鈴としては、生地がふんわりとして足首まで丈のあるジョーゼットを選んだのだが。
「バレエっったら、こいつに決まってる」
本郷は、クラシック・チュチュにこだわった。裾がほとんど水平に広がっていて、かぶりつきから見上げられると、おとなしく立っていても股間が見えてしまう。しかも、数点の見本の中でも、裾が短い純白のチュチュが、本郷のお気に入りだった。
「どうせ、パンティだけでなくタイツとかも穿くんだ。これでいいじゃないか。裾の短いほうが脱ぎやすいぜ」
押し切られてしまった。
本来なら採寸して五十鈴にぴったりのサイズを仕立てるのだが、それには時間がかかる。合わない部分はこちらの手で詰めることにして、強引に買い取った。
「リリーにまかしときゃ、大丈夫。あいつは、奇抜な衣装を手作りしてるからな」
バレエシューズ、ショーツ、タイツ、レオタード、そしてチュチュ。支払いの段になって、本郷が目を剥いた。
「新品の振袖一式より高いぜ」
これまでは親に与えられていたから、値段のことは考えていなかった。この代金も当面

は一座の積み立てから借りて、できるだけ早く返済しなければならない。
需要と供給を考えれば、そんなものかなとも、本郷が言った。振袖は、若い女性なら一生に一度は着る。母親から譲り受けたり、貸衣装で済ます貧乏人も少なくはないが、それでもお見合いで着ることも考えると。年間に十万着以上の需要がある。バレエ用品とは桁が違う。
レコードは、三軒目でやっと見つけた。

昼食をとってから東洋娯楽劇場に戻り着いたのは午後一時半。すでに第一回目の公演が始まっていた。リリーの出番が終わったところで、五十鈴はバレエ衣装をお披露目する段取りとなった。本郷も居座っている。
「本番じゃ、何十人もの男に見られるんだ。俺ひとりに恥ずかしがってちゃ始まらねえだろ」
言われてみれば、もっともだった。
スカートを穿いたまま、バレエショーツとタイツを穿いた。それから、意を決してカーディガンとブラウスとスカートを脱いだ。ブラジャーは着けていない。背を向けていても、本郷の視線を意識して顔が火照った。
ワンピースの水着をうんと薄くしたようなレオタードを着て。チュチュの裾が邪魔になるので、先にバレエシューズを履いた。
最後にチュチュ。背中がホックになっているので、三分は掛かった。サイズは、すこし大きい。このまま踊るとチュチュがずれて、見苦しくなるし踊りにくい。

「参った」
本郷が頭を抱えた。
「上っ張りを脱ぐのにひと苦労。薄物はすぐ脱げるが、タイツを脱ぐときにゃ先に靴を脱いで、それから履き直しか。靴がなくちゃ踊りにくいんだろ。客を焦らすってより、いらつかせる」
「チュチュは改造できるぜ」
リリーが助け舟を出した。
「マジックテープってのがある。幅が広くて分厚いセロハンテープみたいなやつで、布の端に縫い付けとけば――背中だから閉じるのは手伝いがいるけど、脱ぐときは一瞬だ」
「へええ。聞いたこともねえな」
「昨年あたりから出回ってる。おれっちも、次の衣装に使ってみようと考えてたとこさ」
「じゃ、ひとつ頼むわ」
五十鈴が口を挟む暇もなく、話がまとまっていく。
「よろしくお願いします」
頭を下げるのが精一杯だった。

翌日の三月三十日は、この劇場の休館日。出演者が頼めば練習に舞台を使わせてもらえる。五十鈴は、一座の三人（と、本郷）に初めてバレエを披露した。まだチュチュの仕立て直しが終わっていないので、普段着のままでバレエシューズだけを履いた。
本郷が音調室で、三軒目のレコード店で見つけた『ドン・キホーテ』を掛ける。ここと

狙って針を落としたが、すこし手前から始まった。
そして、バリエーション（ソロ）のパート。
舞台の袖から小走りに中央へ出て、４番（脚を前後にして足首を互いに逆向き）で一瞬の決めポーズ。快活に愛らしくを心がけて踊り始める。
事前に練習をしてみて、細かな部分を忘れているし、なによりも記憶ほどにも身体がついてこないのを痛感している。とにかく一分半を踊りきって。最後は５番（両脚を閉じて交差させて足首は互いに逆向き）でつま先立ちをして、両手を上げて軽く曲げる決めポーズ。
パチパチパチ。美蝶がお義理で拍手してくれた。が、言葉は厳しい。
「踊れるのはそれだけって言ってたわね」
「はい……ごめんなさい」
あとは、群舞の『振り付け』ともいえない踊りだけ。
チュチュを着て『キューピッド』を踊って。ヌードで同じ踊りを繰り返すと――やはり、観客はシラケるだろうか。
「アラベスクってのが、あるだろ。麗華はできる？」
リリーに尋ねられて、それらしいポーズをとった。ほんとうはピシッと決めて何十秒も（プロなら何分も）静止するのだが、五十鈴は最初からすこしふらついている。
「あと、ピルエットだっけ。つま先立ちで回るやつ。つまり、アラベスクで決めて、ピルエットで舞台を移動して、そのまま盆まで行くってのはどうかな」
盆というのは回転舞台のことだ。

「やってみます」
ふらつく前に（五秒くらい）両脚を床に着けてピルエットで一回転（だけ）。軽いステップで移動して、アラベスク。モダンな洋舞が専門のリリーは、バレエのターンをひとまとめにピルエットと言ったのだろうと推測して、両足ターンで移動する。そして、数秒間のアラベスク。アラベスクにも何種類かあるのだが、自分でなんとか真似できるのはひとつきりだから、それを繰り返す。
舞台を一往復してから花道へ。
（あ、そうか……）
客の鼻先で脚を高く上げれば、股間が丸見えになる。恥ずかしいとは思うけれど、お客には満足してもらえるんじゃないかなと、そんな計算が頭に閃いた。リリーは、最初からそれを考えていたのだろう。
「ここまでで七分か。あとは盆の上だけど……さてねえ」
「オナニーをしたことがないってんだから、難しいな」
音調室から戻ってきた本郷は、座席の配されていない場所に立って腕組みをしている。
「付け焼刃じゃ、さすがに客も鼻白むだろうし、寝転がる振り付けなんて、バレエにはねえしな」
「あの……盆（円形舞台）での演技をアラベスクにしたら、どうでしょうか」
五十鈴は、ふと思いついたことを口にした。オトナの議論に口を挟むのではない。自分のことなのだ。
「バレエはステップの踏み方が幾つもあります。わたしにできるのは――スキップとかツ

ー・ステップとか、簡単なものだけですけど。それに手の動きを組み合わせれば、基本的な踊りになります。それと、アラベスクは動きを止めますが、アチチュードといって、脚を高く上げる動作もあります」

身体では覚えているけれど、カタカナは忘れた動作も多い。

「あの……舞台でやって見ます。見ていてください」

五十鈴は舞台中央に戻って、『キューピッド』の終わりの決めポーズからステップを踏み始めた。ピルエットの連続で移動するのは難しいので、両脚ターンで。最初に腕を水平に伸ばして、ターンの途中で縮めて回転を速くしたり。移動と移動の合間に脚を跳ね上げる。リリーのような勢いの良さではなく、優雅を心がけて。思いついて、膝を床に着けるお辞儀も採り入れてみた。ゆっくりと立つのではなく、その姿勢からジャンプしてメリハリをつけた。

円形舞台で決めポーズ。パチパチパチと、本郷が拍手した。

「出来た。当面は、これでいけるな」

「オナニーも知らない処女ですってのも、看板になるぜ」

「つぎは、『御開帳』まで通しでやってみよう」

ドキン。心臓が跳ねた。『御開帳』まで練習するなら――全裸にならなければならない。

できるだろうか――という自問には即答する。

（やらなくちゃ……！）

――五十鈴はブラウスとスカートで、舞台の袖に立った。スカートは何度も折り返して太腿の半分は露出している。下着はズロースだけ。本郷の提案だった。

「チュチュとショーツだけでいいじゃねえか。着てても股座が見えちまうんだから。いっそ、チュチュを着たまま最後まで踊って、いきなり全裸で盆に乗るってのも目先が変わってて、受けると思うぞ」

レオタードやタイツも脱ぐのに手間がかかるから、最初から脱いでおけという、女性にはできない発想だった。

スカートの裾を短くした分だけ、軽やかに踊れた。決めポーズからゆっくりとお辞儀をして、そこで（もたついたけれど）ズロースを脱いだ。左足は残して８の字にたたんで右の足ぐりも左足に通して腿に留めた。ゆったりした仕立てだからボテボテしているが、布の少ないバレエショーツなら、ガーターベルトくらいにすっきりするだろう。

曲は『ドン・キホーテ』の次の場面に映っている。陽気でテンポも早い。ジャンプとターンを交えてステップを踏んで、舞台の前端を往復する。委縮しがちな脚を大きく動かすことだけを考えて――回転舞台にたどり着いた。

回転舞台の正面には、本郷が陣取っていた。左右に美蝶と美絵もいるのだが、それは目に入らない。

たった一人の男性に見られるくらいで恥ずかしがっていては、大勢の観客に『御開帳』なんてできっこない。五十鈴は大きく深呼吸をして、ブラウスのボタンに手を掛けた。かすかにふるえる指で、たどたどしくボタンをはずして。意を決してブラウスを脱いだ。本郷の視線を意識しないよう、照明室の窓（の横のあたり）を見上げながらスカートに手を掛けた。無我夢中でホックをはずして、スカートを落とした。

円形舞台に立つと、アラベスクとピルエットを数回ずつ。そして……目を閉じて。しゃ

がむというよりは、すとんと腰を落とした。心臓が喉元までせり上がってきたような錯覚。膝頭を震わせながら、両脚を思い切り開いた――というのは五十鈴の心裡で、実際には膝頭と膝頭は三十センチと開いていない。それでも。右手を股間に下ろして、人差し指と中指を割れ目の両側の盛り上がったところに押し当てて……エイヤッと指を広げた。

パンパンパン。本郷が柏手を打つみたいに大きな拍手をした。

「出来たな」

へたへたっと、五十鈴は尻餅をついた。控えめな『御開帳』よりも、よっぽど股間を曝しているのにも気づかない。

「注文は、いろいろあるけどね。とにかく、ひと休みしましょう」

五十鈴はやっと我に還って、あわてて服を着た。

楽屋に戻って、コーラを飲んで。

「最後まできちんと演じたのは褒めてあげるけど。及第点はあげられない。どこが悪かったかわかる？」

美蝶に指摘されるまでもなく、最低の出来を突き抜けていたと自分でも感じている。

ガチガチに緊張していた。あれでは、お客に楽しんでもらえない。笑顔は無理でも、表情を和らげなければ。そう答えたら、美蝶がうなずいた。

「それが一番大切なことね。踊り子として気を使うべきところも、いっぱいあるんだけど」

まず、回転舞台で脱いだのが間違い。衣装を持ち歩きながらの『御開帳』になる。花道の手前で脱いで舞台の奥へ放っておくと退場の直前に拾える。花道では進行方向に向かってポーズを決めていたが、観客に見せつけることを意識して、横向きが良い。それから、

それから……。
「まあ、いっぺんに全部は無理だけど。何度か演じてると、お客の食いつき方で自然とわかってくることも多いわね」
――さらに二回、通しのリハーサルをした。チップのもらい方はリリーの提案で、無難な方法に決めた。左手で受け取りながら、右手で客と握手をする。無難とはいうが、直前まで女性器に触れていた手で握手をしてもらうのだから、客としては間接キッスならぬ『間接おさわり』をした気分になるかもしれない。その瞬間だけは『御開帳』がお留守になるが、円形舞台でのアラベスクを無理に引っ張らず、『御開帳』の時間を長めにすればいい。
チップをもらう客とは別の方角へ立膝とかして、できるだけ多くの観客にサービスする方法もある――と、本郷が考えてくれた。

翌日の金曜日が千秋楽。花園一座は偽スター・コンビと別れて、土曜日の朝に拠点へ移動した。
花園一座はモダン・ミュージックシアターの経営者が持っているアパートに、割安料金で住んでいる。本郷が四畳半ひと間。リリーは六畳ひと間。どちらも共同便所。美蝶と美絵は、六畳と三畳のふた間に同居で、ここだけは中に便所が設けられている。もちろん、入浴は銭湯。五十鈴は当面、リリーと同居することになった。きちんと稼げるようになったら、そして空き部屋ができたら独立する。
帰ったその日のうちに、劇場主兼大家と劇場支配人の二人に挨拶をして。四月十一日の初日まで、午前九時から十時半の間は舞台でリハーサルをする許しをもらった。もちろん、

出演者の稽古の妨げにならない範囲でだが。

リハーサルを始める前に、『キューピッド』の部分をテープレコーダーにダビングしてもらった。できるだけ不自然にならないように、曲を繰り返して二分半に引き伸ばした。やはり一分半では短すぎると、本郷を除く一座の三人の意見が一致しての『水増し』だった。それで踊ってみると、曲の継ぎ目でもたつくけれど、踊れないことはなかった。

それから、通しのリハーサル。出演中の五人の踊り子のうち、ヒモ付きが二人。さらに、従業員に頼み込んだり、劇場主も支配人も協力してくれて――五十鈴は、本郷以外の男性複数の前で『御開帳』をして、劇場主なんかは「ほんとうにあげるよ。後で返さなくていい」チップまでくれた。これで五十鈴はずいぶんと、度胸がついた。

短い練習の後は、暇を持て余した。故郷の両親に手紙を書いたが、まだ一円も稼いでいないし、威張れる仕事でもないので――元気にすごしていることと、『職場』の先輩たちが親身になってくれること。それくらいしか、書くことはなかった。

ときには、リリーの『勉強』につき合った。といっても、洋画に限らずあれこれの映画を観るだけだったが。

不定期にバレエ教室に通う段取りを本郷がつけてくれた。『菱口興行』という芸能事務所の名刺を出して、五十鈴は女優の卵だが小学生時代にバレエを習っていたので、そちらの方面の才能も伸ばしたい――ストリップ嬢も女優のうちとすれば、まんざら嘘でもないだろう。

嘘なのは、本郷の肩書のほうだと疑った五十鈴だが。こちらも、本当らしかった。一匹狼では座長のヒモに見られかねないので、形の上だけは芸能事務所に所属しているのだと

いう。
五十鈴の学芸会並みのバレエに危うさを感じての計らいだろうが――四月二十日までの公演が終わったら、隣の県で二十四日から休み無しで一週間。実際にバレエ教室へ行けるのは、黄金週間からになる。
休みの十日間のあいだに、五十鈴は手持ちのお金を（チビチビ）使って、化粧品の一式を買い入れた。化粧の仕方はリリーに教わった、
「外出のときだけでなく、舞台でも薄化粧にとどめときなよ。初々しさが売りなんだから」
そうして十日が過ぎて、いよいよ花園一座に客演一名を加えた初日が明けた。

白鳥の湖

一番手は、客演のキャシー・ブラウン（芸名）。日本人の血を引いているというが、肌の色も顔の作りも身体の大きさも、まったくの外人さんだった。花道の手前に金属のポールが床から天井まで突き立っている。
ピアノのアップテンポな音楽。
最初からブラジャーとパンティ姿の金髪美女が、男にしなだれかかるように（とは、本郷の表現だが）ポールに絡みついて。音楽に合わせて全身をくねらせていたかと思うと、棒の途中まで登って、くるくると回った。頭をのけぞらせて手を外へ振り出した次の瞬間

には、くるんと逆立ちになった。大きく足を宙に蹴って、正立に戻って。ポールに擦りつけるように腰を上下させる。開脚したり閉じたり、そのたびに身体が縦に回転する。動作のひとつひとつはリリーよりも緩やかなのだが、立体的な姿勢の変化が目まぐるしい。踊りというよりは、曲芸に見える。

男の人にはとてもエロチックに見えているのかもしれない――と、五十鈴は思い当たった。

キャシーがポールの高いところまで登って、両脚だけでポールにつかまってブラジャーをはずした。小さく丸めて、客席へ放り投げる。

「返してくれた人に、キスしてあげまーす」

流ちょうな日本語で叫んだ。客席の一角で争奪戦が始まった。

今度は片手片脚でポールを回りながら、パンティも脱いで、同じように放り投げた。

バラバラッと、紙礫の『おひねり』が舞台に投げられる。

全裸で舞台に降り立ったキャシーに、両側から二人の男が近づいて、それぞれに戦利品を差し出した。

「Oh, thank you!」

キャシーが一人ずつ舞台に引き上げて、男に抱きついて本格的なキスをする。

雷鳴のような（やっかみ混じりの）拍手。

『御開帳』も派手だった。差し出された紙幣を、あろうことか股間の割れ目で挟んで引き抜く。数秒間だけ動きを止めて、男の指にまさぐられても平然と――は、していない。

「Ooh!」

「Huuuunn....」
喘いで。それから微笑に戻って、紙幣をバスケットに入れる。
「こりゃ、『おひねり』を根こそぎ持ってかれるかな」
ポールダンスは滅多にない演目なので、一座の皆も袖の奥から見物していた。稼ぎが減るかもしれないというのに、本郷が嬉しそうに言う。共演しているあいだは、彼女も一座の仲間だと考えているのだろう。
キャシーが『御開帳』をしているあいだに、劇場の小道具係（兼大道具係兼モギリ兼掃除夫）が台座を固定しているネジをはずして、踊りの邪魔にならない高さまでポールを縮めた。
二番手は美蝶の日舞。ほんとうに、『おひねり』がひとつもなかった。新人の白川五十鈴のために手控えているのかもしれない。
三番手のリリーが舞台に上がって。五十鈴は舞台衣装に着替える。全裸になって、バレエショーツの内側に香水をひと吹きしてから穿いて。素足にバレエシューズを履く。チュチュに足を通して引き上げて、背中のマジックテープは、美蝶と美絵に手伝ってもらった。
すでにメークは済んでいる。鏡を覗いて、崩れていないのを確かめて。
「お先に勉強させていただきます」
仕込まれたとおりに挨拶をしてから五十鈴は楽屋を出て、舞台の上手に控えて出番を待った。
（できるだろうか……？）
不安がつのる。

（でも、やるんだ。やらなければ……）

一家が破綻する。

――リリーが衣装を拾って、下手に消えた。

スポットライトが消えた舞台の上をおびただしい極彩色の斑点が流れていく。

そして、五十鈴の目の前に光の輪が現われた。光を追うのか光が追うのか、五十鈴は軽やかに駆けて舞台の中央に立った。

客席に小さなどよめきが湧いた。五十鈴の若さに驚いている。『処女バレリーナ衝撃のデビュー！』というポスターだけでは、年齢まではわからない。明示すると、厄介なことにもなる。

すぐに曲が掛かって。４番のポジションからアロンジェ（肘を軽く曲げて上げていく）。五十鈴は軽快に踊り始めた。曲の継ぎ目でもたつくこともない。

二分半を踊りきって。決めポーズから身体を沈めて片膝を床に着ける動作でショーツを脱いで、左の太腿に留めて。そこから軽快にジャンプして立ち上がり、ステップを踏み始めるのだが――足が動かなかった。今は前かがみになっているけれど、ジャンプした瞬間に、股間が丸見えになってしまう。

踊っているときから、わかっていた。リハーサルを見守ってくれた男性は、五十鈴の動作に注目していた。踊りの良し悪しはもちろん、『御開帳』のときも手の動かし方（隠さないように）を見ていた。けれど観客の視線のほとんどは、バレエショーツの細く絞られた一点に集中していた。好意的な乾いた視線と、劣情にぎらつく熱い視線。まったく性質が違っている。

十秒……二十秒……どうしても、立ち上がれなかった。このままでは一家が破綻すると自分を叱咤しても、それでも立てなかった。

「ごめんなさいっ……」

五十鈴は、うずくまったまま両手を顔に押し当てて――嗚咽した。

初舞台を見守っていた美絵と着替え終わったリリーが五十鈴に駆け寄った。二人に抱えられて、泣きじゃくりながら――股間を観客の目に曝して退場する五十鈴。

入れ替わりに美蝶がマイクを持って、舞台に立った。

「お見苦しいところをお見せして申し訳ございません。お詫びとしまして、舞台の最後に花園一座による『花びら大回転ショー』を披露させていただきます」

その声も、五十鈴の耳には届いていない。

「しかし、舞台から逃げなかったのは立派だったぜい」

キャシーも協力してくれて、四人がいきなりスッポンポンで踊りも無しの『御開帳』の大盤振る舞いが終わって。まだしょげ返っている五十鈴を、そんなふうに本郷が慰めた。

「最後まで客にケツを向けなかったのもな」

それは学芸会の練習のとき、先生から教わっていた。演出の場合をのぞき、観客に背を向けてはいけない。もっとも――今の舞台で、五十鈴はそんなことを意識していなかった。まったく身体が動かなかっただけのことだ。

「今日は欠場にしろ。さいわい、明日は水曜の休館日だ。二日間じっくり頭を冷やして、覚悟を決め直しな」

「大丈夫です。次はちゃんと演ります」
「馬鹿野郎！」
パチンと、頬を叩かれた。先生にビンタをもらったときほども痛くはなかったけれど、一座のみんなに迷惑を掛けたのだと、あらためて心に知った。
「その場しのぎで物を言うんじゃねえ。助平な男どもに股座の奥まで見せる性根があるか、じっくり考えてから心を決めろい」
「……」
うわあああっと、舞台の上よりも激しく、五十鈴は泣いた。
「覚悟も性根も、関係ありません。わたしが稼がないと……実家の畑を全部売って……祖父ちゃん祖母ちゃんにまで迷惑を掛けて……」
五十鈴は畳の上に突っ伏して泣きじゃくった。
数分、気まずい沈黙が続く。五十鈴の泣き声だけが楽屋を満たす。
「それじゃ、こうしよう」
本郷の声がやわらかくなった。
「今夜ひと晩、じっくり考えな。演ると腹を括ったら、そう言え。俺が、きっちり舞台を務めさせてやる」
その日の公演が終わるまで、五十鈴はひとり楽屋の隅にぽつんと置き去りにされていた。ひどく居心地が悪かった。
いつの間にか本郷は姿を消していて――最後まで楽屋に姿を見せなかった。
アパートに帰ってから。リリーが一言だけ励ましてくれた。

「詳しい事情は知らないけど。親の為に身体を張ろうってんなら、長続きはしないよ。自分の芸と身体に誇りを持って、それを見せるのが自分でも楽しくならなくちゃ――どっかでへし折れる。楽しいってのは無理でも、自分の商売にプライドを持たなくちゃね」
ずきんと、こたえた。裸を見せるなんて賤しい仕事だと思っている心の裡を貫かれた。
――翌朝。あまり早い時刻の訪問は迷惑だろうと判断して、午前八時になるのを待って、五十鈴は本郷の部屋の薄っぺらいベニヤ戸をノックした。
待ちかまえていたように（事実、待ちかまえていたのだろう）すぐに戸が開いた。
「腹を括ったんだな」
「はい」
本郷がうなずく。
「明日からは演目を変える。否が応でも舞台を務めさせてやる」
さっそくリハーサルだと、本郷は五十鈴を連れ出した。細長い風呂敷包みを抱えていた。
喫茶店でモーニングをおごってもらって。ひそひそ声で打ち合わせ。
「そんな……」
本郷の言う『新しい演目』の内容を聞かされて、五十鈴は絶句した。『キューピッド』の百倍も恥ずかしい。けれど、これなら――本郷の言うように、否が応でも昨日のような失態は犯さずに済みそうだと、それは認めざるを得なかった。
演出は大きく変えて、五十鈴はチュチュを着て踊るだけ。振り付けは変える。それから……。二人の息が合わないと客を白けさせる、その一点だけを練習した。
「あとは、俺に任せときな。自分で裸になって自分で『御開帳』するよりは、ずんと気楽

だろ。ずんと恥ずかしいだろうがな」
経験のない素人女性よりは、よっぽどストリップ嬢の心の機微を理解してくれているのかもしれない――そんなふうに、五十鈴は考えた。

ここで逃げ出したら、もう次は無い。そう自分に言い聞かせて、五十鈴は舞台に立った。
舞台の下手には、大きな岩のハリボテが据えられている。
ダビングし直したテープが回って、原曲どおりの『キューピッド』がスピーカーから流れる。三年以上も昔に習った振り付けが、自然と身体を動かしてくれた。
踊り終えると、音楽が変わった。『白鳥の湖』第二幕の『情景』。有名な曲だから、バレエや音楽に興味のない人でも耳にしたことくらいはあるだろう。
（やる。やるんだ！）
五十鈴は元気良くジャンプした。花道の手前で一回転のピルエットから一瞬のアラベスク。上手へステップして、舞台の端でピルエットとアラベスク。呪いで変身させられた姫君が、ようやく白鳥の身体に慣れて、軽々と羽ばたいている――ように見せる。難易度の（五十鈴にとっては）高いステップは踏まず、軸をふらつかせず、手足を滑らかに動かすことを心がける。
ハリボテの後ろに本郷が忍び寄るのが見えた。分厚い生地のシャツと粗末なチョッキ。ズボンは膝が抜けていて裸足。背中に籠を背負い、手にはボウガンとかいう武器を持っている。玩具の鉄砲から銃身を外して、先端に玩具の弓をネジ留めした手作りの小道具。
新聞紙を細く丸めて作った矢を、本郷がボウガンにつがえた。

本郷は最初からこの芝居を考えていたのだと、五十鈴は推測している。舞台で立ち往生することまで見越していたのかもしれない。

白鳥が岩に近づく。猟師の姿は観客に見えているが、白鳥からは死角――という設定。観客に正面を向けてアラベスク。その瞬間に、矢が放たれた。矢はスカートの重ねられた布に（梱包用の粘着テープで）突き刺さった。白鳥が、その場に倒れ伏した。これで、五十鈴の『演技』は、おしまい。

本郷がボウガンを床に置いて、仕留めた獲物に近づく。矢を抜き取ってから、背中の籠を手に持ち替えて、仕留めた獲物を担いだ。両肩に五十鈴の膝を乗せて、逆さまに背負っている。

そのまま花道を通って円形舞台へ運ばれ、うつ伏せに寝かされた。

（見られている……）

目を閉じていても、股間に突き刺さる視線を感じてしまう。

本郷はナイフを振りかざして、獲物の皮を剥ぐ仕種をしているはずだ。

マジックテープが剥がされて、チュチュを脱がされた。

普通のショーとは逆に、楽曲の音量が上がった。呪いが解けて白鳥が姫君の姿に戻って、猟師はびっくり仰天――の場面だ。脱がしたチュチュと裸身を交互に見比べて――やがて、悪心を起こす。その悪心で五十鈴が思わず（すこしくらい）叫んでも、音楽で掻き消すという深謀遠慮まで事前に聞かされている。

ショーツが膝までずり下げられた。そして、あお向けにひっくり返されて、ショーツを抜き取られた。

後ろから抱きかかえられて上半身を起こされ、円形舞台の縁ぎりぎりで膝立ちの形にされて。猟師の手が姫君の脚をじわじわと割り開いていく。

猟師の左腕が乳房の下を抱え込んで、掌が乳房を撫でさすり揉みしだく。ほとんどは『真似』だが、実際にも乳房をさわっている。

そこまでは五十鈴も動かなかった――というより、固まっていたのだが。

猟師の右手が腹を滑り降りて、鼠蹊部に触れた。だけでなく、肉の盛り上がった部分にまで指を這わされた。リハーサルと同じだった。だから、リハーサルのときのようにピクンと腰が震えた。膝を閉じ合わせたい衝動を、懸命に抑え込む。

（まだまだ……これくらいじゃ済まないんだから！）

自分を叱咤激励しているのか、わざと怯えさせているのか、怯える五十鈴を麗華が愉快がっているのか――自分で自分の気持ちがわからない。

三半規管の働きで、身体が右へ右へとゆっくり回っているのが感じ取れた。一人ひとりの観客に股間を覗き込まれるのは、せいぜい数秒。そのかわり、かぶりつきにいる全員に見られてしまう。

本郷の左手が口を押えた。

（来る……）

大淫唇を撫でていた指が、つうっと上に動いて。淫裂の頂点に埋もれている突起を下から上へ掘り起こした。

（……！）

震えるなんてものじゃなかった。ビクンッと腰が跳ねた。

死んでいる白鳥が動くなんておかしいし。姫君にまだ息があるのなら、すぐにでも介抱するのが当然なのだが。そんなことは観客にとって、どうでもいいことなのだ。処女が男の指に翻弄される。観客がキャシーの派手な『御開帳』よりもずっと興奮している熱気が、五十鈴の肌に感じ取れる――ように思えた。そんなことを考えてしまうほどに、五十鈴は羞恥に悶えている。そんなことを考えられるくらいには、冷静でもあった。

「真似事だけさ。生娘を……すくなくとも客の目の前で追い込んで愉しむほど、俺は悪趣味じゃねえ」

真似事でこんなになってしまうのなら、本気で追い込まれたらどうなってしまうんだろう。男女の情交について興味を持ち始めている五十鈴だった。

五十鈴の感覚では十分以上も円形舞台が回り続けて、ようやく止まった。

「お客様にお願い申し上げます」

音楽が絞られて、アナウンスが流れる。

「ご覧のように、白鳥の姫君は動けません。申しわけありませんが、お客様のほうで右から左へ順に移動して、姫君をご鑑賞ください」

本郷が両手で股間の襞を左右にくつろげた。

それまでは身を乗り出していてもおとなしく席に座っていたかぶりつきの観客が立ち上がって、鼻息が股間の叢をそよがすほどに顔を近寄せた。

「穴の奥に、白っぽい襞があるな。これが処女膜ってやつか」

「初めて見た……今日は、ここから動かねえぞ」

入れ替え制ではないので、その気になれば四回の公演をぶっ通しで見物できる。

居座りを宣言した客が、百円札を縦に二つ折りにして五十鈴の手に握らせようとした。
「お客さん。それは無理ってもんです」
本郷が、かたわらの籠を指差した。客は素直に百円札を引っ込めて、十円札を籠に入れた。両側の客が、ちいさく笑った。
そうして、博覧会の目玉展示品を見に押し寄せた人々のように、観客は長蛇の列を作って、せいぜい十秒ほども処女の女性器をしげしげと拝観して、なにがしかの『おひねり』を籠に放り込んでいく。向こうから見せに来るのではなく、こちらから見に行くのだから、御賽銭のひとつも出さないことには決まりが悪い――という心理まで深読みしての演出だとしたら、本郷もなかなかの策士だ。
そのうち。ひとりの客が「うおおっ」と野太い奇声を放って、舞台から何かを摘まみあげた。
「処女の毛だ。これで、週末の競馬は大勝利だ。ありがやたありがたや」
客は一本の淫毛をハンカチにくるんで胸ポケットにしまった。百円札を籠に放り込んで、麗華の股間に向かってパンパンと柏手を打った。
（……？）
処女の淫毛がギャンブルの御守りになるなんて迷信だかジンクスを、もちろん五十鈴は知らない。
「あと三分でショーが終わります。まだのお客様は、お急ぎください」
「おおい。まだ膜は閉じたままだぞ」
館内が、どっと湧いた。

その三分が過ぎて。猟師は変身が解けた姫君を、文字通りにお姫様抱っこで、もちろん『おひねり』や御賽銭の詰まった籠もチュチュもショーツも忘れずに、花道を悠々と引き返したのだった。

「やったね。大成功だよ」

リリーが五十鈴を抱き締めて祝福してくれた。

「dead one のくせに dead heat だネ」

死んだふりをしていただけで、この私と張り合うなんて――とは、キャシーの発音が本物なので、五十鈴には理解できなかった。けれど、彼女がにこにこ笑っているのはわかった。

その日の四回の舞台で、白鳥麗華（と、本郷のコンビ）は、六千円を超える『おひねり』を稼いだ。デッドヒートどころか圧勝だった。

客からの『おひねり』は踊り子が独占するのではなく、それぞれのルールで分配されるところが多い。花園一座では、一割を劇場の従業員に分配して、残りの半分が踊り子の取り分。半分は一座で均等に分ける。キャシーも、このルールに同意している。五十鈴の取り分は三千円弱。ただし、共演というよりも白鳥麗華を小道具に使った独演の感もあるが――本郷と折半した。その他にキャシーが稼いだ四千円のうちから五百円ほど。美蝶と美絵からの分配も合計すると、出演料の二倍以上になった。

この調子なら、バレエ衣装で借りたお金は数日で返して、公演が終わるまでに闇金への一か月分の返済額も稼げそうだった。

しかし。すぐに新たな問題が生じた。
舞台に落ちている淫毛を鵜の目鷹の目で探して、勝手に拾って御賽銭をはずんでくれるのはありがたいのだけど。
「売ってくれよ」
なんと、千円札を差し出して懇願する客が現われた。
「見せ物だ。売り物じゃねえよ」
本郷が突っぱねる。
その客は楽屋まで押しかけようとして本郷に追い返されると、フルーツバスケットと花束を差し入れた。こうなると、白鳥麗華が顔を出してお礼を言わなければならない。
「一本でいいから、あそこの毛を売ってもらえないかな。この通り」
分別盛りの男が、小娘に深々と頭を下げる。土下座するのではないかと、五十鈴が思ったほどだ。
「ほんとに、困るんです。お願いですから、諦めてください」
本郷にきつく言われているので、客の頼みを聞き入れるわけにはいかない。
しかし、その客は諦めなかった。夜まで流連(いつづけ)て翌日は朝から円形舞台の前に陣取って、ついに抜け毛を獲得したのだった。そして、ほんとうに千円札を喜捨した。
「売ってあげれば、いいのに」
キャシーが首をかしげた。
「一本千円なら、一日で何万円も稼げるヨ。もたいない」
女淫でチップを受け取るくらいだから、そういったことに抵抗はないらしい。

「今日明日のことだけを考えりゃ、その通りだ。しかし、長い目で見ると割に合わない」
評判が大きくなると、警察に睨まれる。五十鈴には公称年齢の弱みがある。劇場にも一座にも迷惑を掛ける。
御守りの霊験を信じ込んで一世一代の大博打を張って、外れたら逆恨みされる。硫酸を掛けられるか暴行されるか、わかったものではない。
そして。五十鈴が処女でなくなったときの反動が大きい。熱烈なファンほど、裏切られた思いになって愛想を尽かす。
「地道に稼ぐのが一番さ。一日に六千円で地道もあったものじゃないが」
「ジミチ？」
「派手なことはせず、真面目にコツコツ――踊って脱いで見せてってことさ」
「Huuumn? でも、あの子くらいは稼ぎたいネ」
楽屋の隅で音量を絞っているテレビをキャシーが指差した。五十鈴と変わらない年齢の少女が、フリルたっぷりのピンクのドレスを着て、可憐な仕種を交えて歌っていた。昨年にデビューした歌手で、この夏に封切りの青春ドラマのヒロインにも抜擢されたそうだ。
「pop song が hit したら、何百万円も稼げるネ」
「本人の実入りは、踊り子の方が多いくらいさ。一日も休めないし、睡眠時間だって削られる。そして、人気が落ちたらお払い箱だ」
「Unbileavable. You are a liare.」
「お国じゃ個人マネージャーが付くそうだが、日本はプロダクションだ」
プロダクションが、これと思う新人を発掘して、歌や踊りのレッスンを受けさせる。寮

に住まわせて私生活まで管理して、そして売り出しに大金を投じる。投資に見合うだけ稼げるようになるのは、何十人に一人。歌番組に引っ張りだこで映画まで出演するのは、百人千人に一人。その一人が、稼げない何十人を養う。プロダクションの経費も負担させられる。しかも、プロダクションそのものも容赦なく稼ぎを吸い上げて、本人には契約時の給料しか払わない。よほど親がしっかりしていて不利な契約を結ばせず、しかも有力な親分が後ろにいれば、ナントカ御殿を建てることも夢ではないが。

「ずいぶん詳しいんですね」

「言っただろ。俺は芸能事務所の人間だって」

名義上だけのことだとも聞かされている。最初はストリップ商売も芸能界みたいだと思っていた五十鈴だったが、みたいではなく芸能界そのものではないかと、認識を改めているところだった。歌唱、映画演劇、漫才。ストリップだって、芸を売る商売には違いない。もっとも。歌舞伎は高尚な『芸能』だけどバレエは『芸術』だという認識は、まだ残っている。ボリショイ・バレエ団の人を芸能人だというと、あっちこっちから叱られるに決まっている。でも、『芸能界』はあっても『芸術界』という言葉は聞いたことがない。そこまで考えて五十鈴は、最初の日に――本郷がバレエを高尚だと失言して、美蝶とリリーから吊し上げられたのを思い出した。

けれど、ストリップには『裸』しかも『御開帳』がある。やっぱりストリップは他の芸能とは違うのだろうか――と、それは突き詰めて考えない五十鈴だった。歌手デビューなんてできっこないし、本郷の話だと今よりも稼げそうにない。とにかく。月に一万円は生活費や必要経費の他に稼がなければならない。十年間で百二十万円。両親の負担まで肩代

わりして繰り上げ返済するには、二百四十万円。それまではストリップ嬢として生きていくしかないのだ。

公演の後半になっても、処女の毛を売ってくれとせがむ客は増えこそすれ減りはしなかった。アパートにまで押しかける者もいた。これでは、一座のみんなどころか、無関係の入居者にまで迷惑を掛ける。

悩んだ末に、五十鈴は根本的な対策に思い至った。『無い』物は売れない。

本郷を相手はさすがに恥ずかしかったので、リリーに相談してみた。

「それが手っ取り早くて完全だな。形を整えるってのには反対したけど、綺麗サッパリなら……初々しいってより、麗華だと痛々しくなりかねないんだが。ま、そういうのが好きな助平だって多いらしいからな」

リリーにしてもキャシーにしても、ど真ん中の剛速球を投げ込んでくる印象を受けた。

その夜。五十鈴は銭湯で淫毛をすべて剃り落とした。一座の三人が五十鈴を囲んで、他の入浴客の目を遮ってくれた。

『売り物』を処分してしまったことを、わざと本郷には言わなかった。舞台の上で驚かしてやろという茶目っ気を出したのだ。

悔しいことに、本郷はまったく驚かなかった。もしかしたら、座長あたりから聞いていたのかもしれない。

驚いたのは、観客だけだった。

ギャンブルの御守りを手に入れられないとわかって嘆いた客もいるにはいたが。
「ふえええ。こりゃまた……まさしく、砂漠の中のオアシスだねえ」
なんて風流なことを言う客もあれば。
「どうにも、小さな女の子を虐めてるような……」
良心が咎めるのではなく。
「……くそう。おっ勃っちまった」
リリーは助平と婉曲に表現していたけれど。幼い少女を連想して勃起（そういうことには耳年増にならざるを得ない環境だ）させるとは――変態性欲者だと、五十鈴は呆れた。でも、軽蔑はしない。お金を払ってまで女性器を見たいなんて、清い乙女には変態行為に思える。そして五十鈴は――乙女ではあっても、清くはない。世間の垢がこびりついてきたというのは、さすがに惨めなので。つまりはオトナになったのだと思うようにしている。

最初の壁

白鳥麗華のデビュー公演は、初日の不始末を挽回して大成功に終わった。
税務署に申告しない稼ぎは二万円にもなった。もっとも、初日に迷惑を掛けたお詫びとして（白鳥麗華への『おひねり』でみんなも潤った事実には触れずに）千秋楽に、踊り子だけでなく劇場主から従業員まで招いて、身の丈にあったささやかな宴を張ったから、五

千円ほど使ったけれど。知恵を授けくれた本郷も同額を出してくれたから、駆け出しのストリップ嬢としては、ちょっと身の丈を超えていたかもしれない。

翌日から二日間の短い休養。三日目には、つぎの公演地へ出発した。客演のキャシーは別の劇場へ移っている。

いよいよ、白川麗華の独り立ちだった。

にしては、しょぼくれた劇場だった。客席も壁際まで椅子を並べて四十ほど。ろくに湯も湧かない歓楽街としての温泉地には、こういった劇場が多いと聞かされた。劇場の外見以上に、経営者もしょぼかった。花園一座との契約は一日二千五百円。頭数が増えたのはそっちの都合。金額は変えないと言ってきた。

「こんなとこ、見限ってやろうかしら」

美蝶が憤慨する。

「向こうの言い分にも筋が通ってないわけじゃない。いいさ。夜遊びの軍資金がなくなるまで、『おひねり』を奮発させてやろうぜ。御師匠さんで通用する美蝶と美絵、本場仕込みのロケンロール・ダンス、それに加えて四十六サンチ級の処女膜だ」

「なんだよ、四十六なんとかてのは？」

「これだから、女は。帝国海軍の世界最大の超弩級戦艦、大和と武蔵の主砲じゃねえか。これくらい、小学校の男の子だって知ってるぜ」

「悪かったね。おれっちは男でも小学生でもねえんだよッ」

出演料はともかく（ではないが）、持ち時間の調整もあったが、これはすでに座長が香盤（出演順）を作っていた。この劇場と契約したのは二か月前で、まだ新人がほんとうに来

るのかさえ不確実だったので――美絵、美蝶、リリー、姉妹レズの予定だった。美絵と美蝶が交替で踊ることにすれば、まったく問題はない。これをいちばん喜んだのは美絵だった。

「一雄は二人とも師匠格だなんておだてるけど、比べれば一目瞭然だもの」

日舞とレズを続けて演るのは着付けに無理があるので、口開けが日舞、トリがレズというのは動かせない。

「麗華を先にするのはやめてくれよ。おれっちが干上がっちまう」

先輩後輩は関係ない。リリーが『おっぱい挟み取り』でチップを吸い上げて、とどめに四十六サンチを撃ち込む――本郷の言葉をさっそくに借用して、リリーはそんなふうに戦略を説明した。

「あたしたちが貧乏くじをひかされるんだね」

「こんなとこにゃ、美蝶のファンもいねえだろうからなあ」

仕事の打ち合わせにしても楽屋での冗談にしてもリリーと本郷がいちばん冗舌で、そこに美蝶が絡む。たまには美蝶とリリーの連合軍に対して本郷がひとり枢軸というときもあるが、いずれにしても五十鈴はもちろんだか美絵もあまり自分からは発言しない。姉への遠慮だろうと、五十鈴は思っている。

初日の結果は惨憺たるものだった。一座としては、他の三人が荒稼ぎしたから、それなりに潤った。問題は五十鈴だった。

最初に考えた演出。着衣で『キューピッド』、ノーパンにチュチュで舞台をバレエらしく

跳ねまわって、全裸になってステップを踏みながらピルエットを交えて円形舞台へ進んで。回転が始まるとアラベスクもどきとお手軽ピルエット。そこまでは、幾許かの『おひねり』も投げられたのだが。

いざ円形舞台の縁にしゃがんで。開脚して。身体が柔らかいし、自然と腰を突き出す形になるので、後ろから手をまわしての『御開帳』。

このあたりは警察の取り締まりも緩やかなので、ポスターには『新卒の処女**膜**バレリーナ衝撃のデビュー！』とまで煽ってもらった。それもあってか、顔を寄せ過ぎるほどに寄せて穴の奥まで覗き込んでくるのだが――一瞥すれば納得とばかりに、すぐ顔を引いてしまう。チップを差し出す客もいない。

顔が引き攣っていると気づいて、無理に微笑を浮かべようとすると、いっそう強張ってしまう。

ベテランなら、客の乗りが悪いときには、「ソーレッ」と掛け声で立ち上がって拍手を要求して、それに合わせて腰を振ってみたり、『御開帳』をしながらオナニーの真似事とかを（それでも食い付かなければ本気で）するのだが。残念なことに、これまで五十鈴は、そんな湿気た場面を見ていない。

内心ではオロオロしながら、規則的に移動しては機械的に『御開帳』を繰り返して――花道を引き返し、本舞台を一往復して。チュチュを拾い上げると、投げキッスをしながら退場した。

五十鈴は悄然と楽屋へ戻った。

「しくじったね」

リリーが、馬鹿にするでもなく、しかし慰めるでもなく、淡々と評価する。
のろくさと普段着に着替えて、自分に割り当てられた化粧台の前でしょげ返っていると。
「うおおおおっ」
「いいぞお」
観客のどよめきが、楽屋まで聞こえてきた。指笛も。
白鳥麗華が盛り下げてしまった場を沸かそうとして、花園姉妹が熱演をしているのだろうとは五十鈴にもわかったが。双頭張形まで持ち出してほんとうに挿入している――とまでは、想像もつかなかった。
――二回目も同じ結果に終わってしまった。
待ち時間のあいだ、ずっと鏡とにらめっこして微笑の練習をしてみたが、意識すればするほど、観客の視線がなくてさえ顔の筋肉が強張ってしまった。
舞台では、わざとのけぞって表情を隠し、バランスを崩して後ろにひっくり返りそうになるまで腰を突き出したりもしてみた。それでも、客はすぐに身を引いてしまう。
「どこがいけないんでしょうか」
リリーに尋ねても突き放された。
「まずは、とっくり自分で考えなよ。おれっちが助言したら、おれっちの型にはまっちまう」
「こういう場所は、よそとは違う事情もあるからねえ」
客は劇場では抜かない。どの劇場でも建前として行為が禁止されているという以上に、ここでは客がもったいないと考えている。宴席には桃色酌婦も来るし、チョンの間もあち

こちにある。旅館に頼めば、朝までなにもかも面倒を見てくれる仲居が付く。言ってしまえば、ストリップ鑑賞は時間つぶしでしかない。

「大丈夫。夜になったら、雰囲気が変わってくるから」

美蝶の言葉通りになった。

三回目には酔客の姿が目立つようになった。酔った勢いで女を買いに出るのは若いからできることで――年配の客は、ストリップ劇場を打ち止めにするつもりになっている。だから、麗華のぎこちない『御開帳』にも、それなりに食い付いてくれた。チップも（三人だけだが）もらえた。もっとも、リリーの『おっぱい挟み取り』に比べたら『女性器で間接握手』は霞んでしまうのも事実だった。

四回目は、ほとんどの客が酒気を帯びているどころか、泥酔していて、かぶりつきに陣取りながら眠りこける強者（？）までいた。チップは五人。一人だけ千円札を張り込んでくれたのだが――それに気づいて五十鈴が驚いていると。

「間違えた。こっちにしてくれ」

取り返されて、十円札を差し出された。

（侮辱だわ。これを受け取っちゃいけない）

咄嗟にそう考えて五十鈴は立ち上がり、三メートルほども移動してから『御開帳』を再開した。

「あれは上出来だったねえ」

座長に褒められた。

「ストリッパーにゃ、ストリッパーなりの誇りってもんがあるんだよ。その心意気を忘れ

ちゃいけないよ」
悩み迷っているときには、わずかな言葉がヒントになることもある。
五十鈴は自分にもうまく説明できなかったが、なにかが吹っ切れたように思った。
――翌日からの舞台は、それなりの形になった。チップも坊主（ゼロ）ということはなくなった。四十六サンチどころか、四十六ミリほどの威力もなかったけれど。

五月一日に拠点に戻って。その日から一週間ほど、五十鈴はバレエ教室に通った。バレエ教室は水曜日が休みで、土曜の半ドンと日曜日とがふだんは生徒数も多いのだが――黄金週間のおかげで閑散としていて、それだけ個人的な指導を受ける機会もあった。
「何年もレッスンから遠ざかっていたわりには、基礎をきちんと覚えていますね」
社交辞令ではなさそうだった。
「映画に出演するようになったら、教室の名前を出してもらって構わないわ」
出してほしいと言っているのだと、五十鈴にもわかった。箸にも棒にもかからない不出来な生徒だったら、こんなことは言わないだろう。五十鈴は、ちょっぴりだけ自惚れた。
――連日のバレエ・レッスンと、リリーの『勉強』のつきあいと。二回ほどは一座でスタジオを借りて練習会もあった。新しい振り付けを考えたり、それを互いに批評したり。五十鈴は振り付けを変えるのではなく、技に磨きをかけることに専念した。
「素人目で見ても、うまくなってきたとは思うが……どうにも、色気が足りねえな」
本郷に指摘されて、五十鈴は困惑する。
「腰のくねらせ方とか、目線とか、そういった問題じゃねえんだ。情感てやつだが、うま

く説明できねえな」
「男を知ると、女はガラッと変わるんだけど。まだまだ処女を売り物にしたいしねえ」
「オナニーじゃ駄目か？」
「オナニーをしてるかどうか、同性にだってわからないわね」
つまりは、性的な快感を知っているかいないかの問題ではなく、男女の機微を肌と心で理解する必要があるということなのだろう。
「よし、それならリリーじゃねえが、勉強に行こう。おっと、他のやつは駄目だぜ。麗華ちゃんとのデートだからな」
ドキンとした。冗談とはわかっていても、本郷を男性として意識してしまう。
翌日の『デート』は、リリーが引き合いに出されたのでなんとなく予想はしていたが。映画だった。ただし、成人映画。モギリの男はチラッと五十鈴の顔を見たが、何も言わなかった。
映画の内容に、五十鈴はショックを受けた。在学中の少女が組織からあてがわれた『亭主』に管理されながら売春をするという設定は、非現実的なようでいて、今の自分の境遇を考えると、生々しくもあった。けれど、映像にはちっともショックを受けなかった。裸のシーンでもたいていはパンティを穿いているし、全裸は後ろ姿が一瞬だけ。男女の営みも芸術的表現というのか、手前の花瓶にピントが合わされた画面でぼんやりと男女が蠢いていて、花びらがハラリと落ちたのが、『その瞬間』を暗示しているといった具合。『御開帳』をみずから繰り返してきた五十鈴には、もどかしいだけだった。それでも、前半は食い入るように見つめて、気がついたらパンティがすこし湿っていた。

途中からは、組織の対立とか複雑な人間模様ばかりになって、喧嘩や人殺し。リリーのおかげで目が肥えている五十鈴には、退屈な映画だった。
本郷の意図は、わかった。男女の情感を教えてくれようとしている。
自分の中で何かが変わった――とは、まったく感じないけれど。種子だって、いきなり花を咲かせるのではない。適切な培養土と水を得て、いずれは芽を出すかもしれない。
成人映画館だけあって、ややいかがわしい地区に立地している。つまり、アパートへの帰り路にモダン・ミュージックシアターがあった。
そのすこし先に人だかりができていた。喧嘩、いや一方的な暴行らしい。
「ちょっと隠れてな」
シアター脇の路地に五十鈴を押し込んで、本郷が人だかりに近づいて行った。
白衣を着た二人の男が地面に倒れて、それをヤクザな服装の若者五、六人が蹴りつけている。そばにアコーディオンと募金箱が転がっている。遠くて五十鈴には読み取れないが、募金箱には『傷痍軍人援助募金』とかいった文字が書かれているはずだ。
本郷が若者たちを制止しようとして、何事か言い争っている。
「オッサンは関係ねえだろ」
「ごちゃごちゃ言うなよ」
若者たちの怒鳴り声だけが聞こえてくる。
「こいつら、偽物だ。見ろ」
若者のひとりが、倒れている傷痍軍人の白衣の裾を蹴った。脚を折り曲げて太腿に縛りつけているのが見えた。戦傷を装っている。

街で募金なり物乞いをしている『傷痍軍人』が実は偽物だということは、五十鈴も知っている。元軍人には恩給が支払われ、戦傷者には加算もある。空襲で家を焼かれたり死傷した民間人には一切の補償が無いのだから不公平だと思う。

けれど、それとこれとは別だ。あの人たちのしていることは物乞いではなくて詐欺だ。

「おめえ、あいつのツレか？」

「きゃっ……」

横合いから肩をつかまれた。見張りがいたのだ。

若者が首をかしげて、五十鈴の顔をしげしげと見詰めた。

「おめえ……白鳥麗華じゃねえのか？」

初々しさを強調するために薄化粧にとどめていたのが、いけなかった。

五十鈴は表通りへ引き出された。

「おおい。そいつのスケがいたぞ」

本郷が振り返った。表情が一変していた。それまでの、装った穏やかさをかなぐり捨てて、しかし周章狼狽でも激怒でもなかった。表情が消え失せたと表現するほうが当たっている。

凄まじい勢いで引き返してきて、そのまま若者を体当たりで跳ね飛ばした。

「もう、顔を出すんじゃねえぞ」

路地の奥へ五十鈴を突き飛ばして。追いかけてきた若者たちと向かい合った。

五十鈴の目の前で乱闘が始まった――ようには、見えなかった。若者が殴りかかるのを身体をひねってかわして、こめかみのあたりを横殴りする。若者がぶっ倒れる。くるりと

向き直って、背後から襲いかかろうとしていたやつの脇腹に空手のような蹴りを入れる。
「野郎っ！」
一人が折りたたみナイフを取り出した――のを、高く足を上げて蹴り飛ばした。
殴り合いとかではなく、目の前に迫った『危機』に冷静に対処しているように見えた。
数分で、四人が地面に倒れ、三人ばかりが逃げ失せていた。
「文句があるなら、いつでも相手になってやるぜ。断わっておくが、花園一座の姉妹は菱田組親分の血筋だ。そして俺は、姐さんのお守り役だ。そのつもりで、かかって来な」
路地の奥で固まっている五十鈴に、本郷が近づく。剽悍ぶりは消え失せて、いつもの剽軽（ひょうきん）な雰囲気に戻っている。
「怖い目に遭わせてすまなかったな。早いとこ、ずらかろう」
手を引かれて路地裏の道を歩く五十鈴。
「あの……さっき言ってたことって、本当なんですか。菱田組の血筋とか……」
本郷が（洋画のワンシーンみたいに）肩をすくめた。
「まあな。そのせいで肩身が狭くなったり広くなったり、いろいろあるさ」
いろいろというのは――五十鈴にも、なんとなく想像がついた。
この時代、ヤクザは警察や弁護士よりもずっと、庶民から頼られていた。被害者なのに逆に疑われたりとか、ややこしい裁判に何か月も（ときとして何年も）かけたあげくに賠償金を大幅に減らされて、しかも相手がそれすらも払ってくれなかったり。ヤクザに頼めば、口利き料は取られるが即決する。ヤクザの側も、堅気衆に迷惑は掛けないという、建前の部分もあるが、いちおうはそれを心がけている。裏世界を仕切ることで、それなりの

秩序を保ってもいる。
とはいえ、世間のお上品な部分は、もちろんヤクザを忌み嫌っている。そういった毀誉褒貶に、座長も曝されてきたのだろう。
――アパートに帰るなり、本郷は五十鈴を伴なって姉妹の部屋を訪れた。
「すまない。座長の名前を出しちまった」
いきなり土下座した。そして、事の顛末を手短に語った。
「まあねえ。麗華ちゃんを護るためだから、仕方なかったんだろうけどねえ」
「そもそも、他人の争いごとに……とは、思えなかったのでしょうね。弱い者虐めですもの」
珍しく、美絵も感想を挟んだ。
「しょうがないねえ。ちょいと待ってておくれ。着替えるから。ああ、麗華ちゃんも一張羅に着替えといで」
これから、親分のところへ挨拶に行くと言う。菱田組を名乗った以上はそれが筋だし、組に属していない半端な連中は、本職の恐さをわからずに暴発するかもしれない。あの一帯を仕切っている幹部から脅しを掛けておくほうが後難を防げる。
リリーの部屋に戻って。五十鈴は困った。一張羅なんて持っていない。両親は外出着を新調してくれようとしたが、五十鈴が断わった。無駄なお金を使う余裕はない。どうせ裸になるのが仕事なんだからという、自虐めいた思いもあった。
リリーは不在だから、相談もできない。
考えあぐねて、生地が擦れて光っている学校の制服に着替えた。舞台衣装に使えるかも

しれないからと、即日採用社の林課長に言われて持ってきていた。
座長姉妹は、舞台衣装とは違う落ち着いた柄の和服を着ていた。本郷も、きちっとスーツを着こなしている。ツンツルテンのみすぼらしい自分を恥じたのだが。
「へええ。バレエ衣装より、ずっと可愛いぜ。菱田の親分、妙な気を……痛てえ」
美蝶に尻をつねられたらしい。
――ちょっと大きな、でも邸宅とか御屋敷とは程遠い家が、この地方全体に睨みを利かしている菱田組組長の自宅だった。組事務所は繁華街に構えているという。
美蝶の口から事情を説明すると、組長が鷹揚にうなずいた。
「一本気なとこは、相変わらずだな」
褒めているのかたしなめているのか。本郷に首をすくめさせておいてから。若者たちの風体を詳しく聞いて。
「あいつらか。四角定規に言やあショバ荒らしだが――とりあえずは、やんわりと注意させとく。しばらくは、アパートと劇場に目を光らせとくさ」
ところで――と、端っこで小さくなっている五十鈴に、親分が目を向けた。
「半年から先の話だが、忘年会には出してくれるんだろ」
質問の先は美蝶。
「親父(おや)っさん。さっき、尻をつねられたとこです」
「馬鹿言ってんじゃないわよ。麗華はあたしの乾分だよ。言ってみれば、親分の義理の身内じゃないか。本人次第ですけど、演させてもらうことになると思いますよ。玄人筋のお眼鏡に敵うとこまで成長してくれてればいいんですけど」

話を聞いているうちに、五十鈴にも漠然と幾つかのことがわかってきた。
美蝶が（当然、美絵も）菱田組の親分と血がつながっているというのは事実らしい。そして、菱田組の忘年会（きっと、何十人も集まる）では、余興として花園一座のストリップ・ショーが演じられるのだろう。
――これは、後日に美蝶本人や本郷から断片的に聞いたことだが。
姉妹は、日舞を習っていた頃から菱田組の忘年会を（しぶしぶ）賑やかしていたという。
さらに前日譚になるが。そもそもは、本郷と美蝶は幼馴染だったそうだ。思春期にいたって恋愛感情が芽生えたのだが。本郷は兵隊にとられて、戦後に復員してみれば空襲で実家は焼失し両親は行方不明。愚連隊の横行に対する自警団に加わったりしているうちに、縁あって菱田組の盃を受けた。
そして、組の忘年会で仏頂面の（ストリッパーになる前の）美蝶と再会して、親分と血筋関係にあることを知った。それで、本郷はスッパリと彼女への想いを断ち切ったという。
その後、さらにいろいろとあって。姉妹が日舞を捨ててストリップ嬢に転身したとき、組長の計らいで本郷がマネージャーに付けられた。
「日本舞踊なんてね。衣装代はかかるし、稽古場は構えなきゃならないし、師匠たって、お月謝だけじゃやってらんないわよ」
五十鈴には、それが強がりのように聞こえた。
本郷は本郷で。姉妹が師匠を許されなかったのは、ヤクザの血筋が一因だったと信じている。興行収入で潤う芸能界はヤクザを抜きに語れないが、茶の湯や日本舞踊といった、高尚だが儲からない世界はヤクザを忌み嫌う風潮があった。

こういった事情は、話の進展に応じてぽつぽつと明かしていくべきかもしれないが、それも散漫に流れるきらいがあるので、ここにまとめて記しておいた。

サドマゾ

五月十一日から拠点のモダン・ミュージックシアターでの公演が始まった。花園一座も四人になったし麗華がまだまだ珍しがられるので香盤に不足はないが、劇場側の横のつながりで客演を迎えることになっていた。

実際には、客演がなかったらみすぼらしい舞台になっていたかもしれない。というのは――公園の二日前から、五十鈴に生理が来たのだった。思春期の少女にありがちなことだが、周期が不安定で、次がいつになるか予測がつかない。

「あたしらなら、海綿を突っ込んで知らん顔で舞台に立つけど……処女には無理だわね。タンポンは紐が見えちゃうし」

紐に色を塗って内側の隅に丸めておけば、まず誤魔化せるが。麗華の場合は、是非とも処女膜を拝観しようという客が多いから、どうやっても紐を見られてしまう。生理が終わるまで麗華は休演ということになった。

麗華の穴を埋めてくれたのは、四十年昔の革命で亡命してきたロシア人の孫娘ナターリヤと、日本人の苦学生（と自称している）丈二。サドマゾ・ショーを演じるという。五十

鈴は初めて聞く言葉だった。エログロの世界では一部の雑誌を通じて認知されつつあると、これも本郷の解説だった。

前日のリハーサルで観た五十鈴の感想は――（女の人を虐める男なんて、最低！）という、当時としては至極まっとうなものだった。

香盤を本家落語の寄席風にいうなら――食い付きが、仕掛けに時間のかかるナターリャと丈二のサドマゾ・ショー。膝前が美蝶で、膝代わりがリリー。トリは姉妹レズビアン・ショーという順番だった。

いつもは使われない舞台前の幕が客席の視線を遮って。二本の太い柱が舞台中央に立てられ、上下を横木が支える。ガターリング（ストッキング留めバンド）だけを太腿に巻いた、キャシーほどではないが日本人ばなれしたグラマラスな裸身が、大の字に磔けられた。

ナターリャの血は四分の三までがロシア（父は純系のロシア人で、母が日本人との混血）だというから、日本人に見えないのは当然かもしれない。

そのロシア娘の口を、大きな結び玉を作った日本手拭いがふさぐ。

「あれくらいはしないと、声は封じられないんだな」

映画なんかでは、ただ口を布で巻くだけの演出が多いのを、リハーサルのときにリリーが指摘している。彼女は踊りに直接関係ないことまで貪欲に『勉強』して、芸の幅を広げようとしているのだと、五十鈴にもわかりかけている。

詰襟服に肩章を貼り付けて腕に『憲兵』の腕章を巻いた丈二が横に立って。低い音量で『海ゆかば』が流れる中、幕が開いた。

異様な舞台に観客が、ちょっとどよめいた。半面、どこかシラケた空気も漂っている。選曲が悪いと、五十鈴は思う。戦時中を暗示するのに軍歌を使うというのは、間違っていない。空元気ばかりが多い軍歌の中で、すこしでも隠滅な雰囲気を出そうとすると、この曲くらいしか五十鈴にも思いつかない。けれど『海ゆかば』は、隠滅よりも厳粛の色が濃い。そして、戦死あるいは戦災死した肉親を想起する人も多いだろう。観客はこの曲を聴いて、ストリップ劇場に来ている自分を恥じるのではないだろうか。

丈二が、手にしていた竹刀をナターリャの乳房に突きつけた。ナターリャが大袈裟にかぶりを振った。丈二が乳房を竹刀で叩いた。リリーよりも豊満な乳房が、はっきりとひしゃげて、ほんとうに叩いていると観客にもわかる。ナターリャが顔をのけぞらせ、全身を震わせて苦痛を身振りで訴える。

もちろん、じゅうぶんに手加減している。リハーサルのあと、裸身には叩かれた痕がほとんど残っていなかった。手足の縄跡のほうがずっと痛々しかった。

顎を持ち上げて顔を近づけて、尋問する芝居。ナターリャがかぶりを振って。また乳房を叩かれる。身体をくねらせて、痛みを訴える演技。

丈二が背後にまわって、尻を叩く。

叩かれるたびに、ナターリャが大袈裟に身悶える。

五分ほどそれを繰り返してから。丈二が竹刀を投げ捨てた。ナターリャの背後から抱きつくようにして、乳房を愛撫ではなく弄んで虐める。ナターリャは正面を見据えて、恥辱に耐える風情でじっとしている。

丈二の手が下へ滑って、股間を襲った。中指を曲げて、実際に穴を穿っている。それは

舞台を見上げる形になる観客にも、見えているはずだった。ナターリャが腰をくねらせても、掌が下腹部に貼り付いているので指からは逃れられない。

ナターリャがいっそう激しくかぶりを振るのだが。快感に悶えているのか性的拷問に恥辱を感じているのか、どちらにも受け取れる。

丈二が指を三本にした。手の平で下腹部も揉みしだく。ナターリャが激しく身悶えして、やがて全身を弓なりにして一切の動きを止めた。

十秒。丈二が指を引き抜くと、がくりと白い裸身が崩れた。

丈二が足首の縄をほどき、手首も解放した。くてくてっと、ナターリャが床に突っ伏して。スローテンポの煽情的な音楽が流れ始めると、しゃきっと立ち上がった。右脚を軽く後ろに引いて、貴族令嬢風のお辞儀をした。

パチパチパチとお義理の拍手。

最初に本舞台の端から端まで『御開帳』をしてから花道に進んで、最後に回転舞台。チップはそれなりに差し出されたが、麗華よりはすこし多い程度。両手で上下に客の手を包んで受け取る。

『御開帳』をしていた手で握手するよりも、もっと客受けのする受け取り方を考えようと五十鈴は思った。

――その日の四回の公演は、ごくふつうに終わった。リリーが新しい振り付けを披露して、ファンからいつもの五割増しくらいのチップをもらったのが、いちばん大きな出来事だったろう。そして五十鈴は――処女膜の噂を聞いて見物に訪れたイチゲン客の注目を浴びてはいたが、常連客からの受けは良くなかった。色気、あるいは情緒に欠けると指摘さ

れて、それなりに仕種を工夫してみたが、どうにもいけない。ストリップ・ショーを演じるという、いわばスタートラインからは本郷の手助けで走り出せたものの、ストリップ嬢としての最初のハードルを前にして、なかなか乗り越えられないでいるのだった。

いっそ、処女を捨てて――男女の交わりを体験すれば色気も自然と出るようになるかもしれないとは思うが、美蝶に言われるまでもなく、それが最大の武器なのだ。あいかわらず、美蝶もリリーも助言はしてくれない。

土曜日に、ＳＭショーが急遽取りやめになった。明け方に丈二が激しい腹痛を起こして救急車で運ばれて――盲腸炎だった。生命がどうこうという病気ではなく、ナターリャも取り乱したりはしなかった。とりあえずは楽屋へ顔を出したが、責め役の男がいなければ休演するしかない。

ＳＭショーの穴は、生理の終わった麗華が埋めた。

ここでも、本郷が男気を出した。マネージャーとして頑張ったというべきか。代役を買って出たのだ。

最初、ナターリャは渋った。丈二とは、実生活でもサドマゾ的な身体の関係を持っている。彼女にしてみれば、本郷との共演は『浮気』に思えたのかもしれない。

「入院費をどうするんだ。丈二に復学を諦めさせるのか？」

二人とも親から縁を切られていた。丈二は昨年の後期から休学して、このさき二年分の生活費を稼ぐために、ナターリャを説得して性癖を実益につなげている。しかし、生活設計が甘かった。そのひとつが、国民健康保険だ。手続きをしていないので、医療費は全額

負担になる。
結局、ナターリャは承諾するしかなかったのだが。演出を本郷流儀に変えることを提案されて、それが彼女にしてみればとんでもない破廉恥に思えたのだろう。さらに楽屋の隅で二十分ほども小声で言い争っていた。
「これまでの三倍は稼がせてやる。俺にまかせとけ」
丈二のように指でこねくったりはしない。金と貞操と、両面から説得されてナターリャが折れた。
麗華に『仕留められた白鳥の湖』を演じさせたときと同じで、新しい演出の練習は要点だけが事前に一座の三人にも披露された。それは、チップの受け取り方だった。
五十鈴は度肝を抜かれた。キャシーは下の唇に客の手を挟んでいたが――本郷がナターリャに仕込んだやり方は、絶対に今の五十鈴には真似のできない、途方もなくエロチックというより淫らな仕種だったのだ。
日曜日に座長とマネージャーが同伴して丈二を見舞い、本郷とのコンビを承諾させた。本郷はひとりで市内を巡って小道具を買い付けてきた。赤い鉢巻を巻いて金色の星を付けたツバ付き帽子と、本物そっくりの拳銃と手錠。葉巻と犬の首輪と鎖。
そして、百個ほどの駄菓子。小粒チョコレートだった。新発売のマーブルチョコレートよりひとまわり小さなプラスチック容器に、ずっと小さなチョコ粒が詰められている。ショーで必要なのは容器のほうだが、食べ物を捨てるなんて、とんでもない。飴玉なんかを入れる広口瓶に詰め替えた。
空になった容器の尻に小さな穴を明けて、一端に結び玉を作ったタコ糸を通す。一座で

手分けして作業しながら、美蝶が軽口を叩く。
「この歳になってニキビなんか願い下げだからね。一雄、自分で始末しなよ」
「大丈夫です。小分けにして、同室の患者さんに差し入れます」
早くも息の合ったコンビの片鱗をうかがわせるナターリャの流暢な言葉が、なぜか棘になって五十鈴の胸にチクッと刺さった。
――麗華が復帰すると演目は五つになるが、元々が麗華の穴を埋めて持ち時間を引っ張っていたから、本来の尺に縮めればいいことだった。本郷の要求で、ＳＭショーは三十分に据え置かれた。
新演出のＳＭショーは、大成功だった。
二本の柱に大の字磔にして猿轡を噛ませておく、いわゆる『板付き』で始まるのは同じだが、ナターリャはパンティを穿いていた。『海ゆかば』ではなく、『インターナショナル』が相当の音量で流される中、ゆっくりと幕が開いた。
曲そのものは勇壮だけど。これを聞いた人は、デモだとか安保騒動とかを連想する。波乱への予感。それだけでも、丈二さんよりは本郷さんのほうがセンスが良い――と、五十鈴は評した。
詰襟服に肩章を貼り付けた本郷がおもむろに登場する。軍帽をかぶって、腰に拳銃のホルスターを吊っている。腕章にはアルファベットを裏返したような文字。まだ戦時中の記憶が生々しい。『憲兵』とか『特高』では余計な反感をあおると考えて、外国での出来事という設定にしたのだろう。楽曲と併せて考えれば、どこの国かは（少なくとも当時の日本人には）明白だった。

音楽が低くなって、いよいよ一幕の芝居が始まる。
本郷は左手に大きな鞄と、右手には細い笞。これも手作りだった。ハタキの柄を縦に裂いて手元は茶色の布で巻き締め、途中の三か所をタコ糸で縛っている。そして、先端には革バンドの端を切り取って薄く二枚に削いだものが、割った竹に挟まれている。
ビュン！
ナターシャの目の前で笞を素振りする。そして、大きく振りかぶって乳房を打ち据えた。
パッシイン！
音は派手だが、ビンタほどにも痛くない。簡単なリハーサルで体験して、ナターリャも本郷の言葉に同意はしていたが。好きでもない男に女の急所を叩かれるのだから――手足を突っ張って頭をのけぞらせたのは、まったくの演技というわけでもなかったろう。
左右の乳房を交互に三発ずつ叩いて観客を芝居に引きずり込むと、本郷は背後にまわって尻を立て続けに叩いた。
それから、丈二と同じように尋問の芝居。ナターリャもかぶりを振って、容疑を否認する。
業を煮やしたといった演技で、本郷がパンティの中に手を突っ込んだ。
ジャーンン！
不意打ちのシンバル。引き抜かれた手には、細い銀色のパイプが握られていた。これも昨日仕入れた小道具。舶来品の高級葉巻のケースだった。キャップを開けて、中に隠されていた紙を引き出す。紙とナターリャの顔を交互に見比べると、激した様子で髪をつかんで顔を上げさせた。左手は垂らして、紙片が観客に見えるようにしている。赤丸や赤線が

描き込まれた地図だった。ナターリャがスパイだと、わかり過ぎるほどにわかる。
パンティが（脱がされるのではなく）引き千切られた。
鞭の柄にコンドームがかぶせられて、それが股間を穿った。約束通り、指でこねくってはいない。
ナターリャが恥辱に悶えているのは演技だろうが。本郷に引きずられて真に迫っていた。
本郷が後ろにまわって。ぐいと肛門に鞭の柄を突き挿れた――のは、観客の死角になっているから真似だけだったが。
やがて、本郷が拳銃を引き抜いた。一メートルほど離れて、銃口をナターリャに向けた。ナターリャが柱を揺らすほどに身悶えしながら、脳震とうを起こすんじゃないかと観客が心配するほどに頭を振り続ける。
本郷が近寄って。こめかみに拳銃を押しつけたまま、何事かをささやく。実際には「オープンショーの時間だぜ」くらいのことを言っているのだろうが。
ナターリャを磔から解放して、前で手錠を掛けた。首輪を巻きつけて、鎖の端を本郷が握った。舞台の端へ引きずっていく。
鎖を引っ張ってナターリャをひざまずかせ、靴で腿を蹴って開脚させた。頭に拳銃を突きつけて、不自由な手での『御開帳』を強いる。
紙幣が差し出された。すぐには受け取らず、本郷が客に駄菓子の空容器を手渡した。機密地図をどこに隠していたかを思い出して、客が紙幣を丸めて空容器に突っ込んだ。それを股間に押し込まれても、ナターリャは拳銃を突きつけられているので逆らえない。
たちまち、まわりから何本も手が伸ばされる。鞄を仕切った片側に詰めてある空容器を

渡す一方で、押し込まれたチップをつぎつぎと引き抜いては鞄の空いた側に放り込んでいく。それでも、ふつうにチップを受け取るよりは時間がかかる。本郷が三十分の長さを要求したのも当然だった。

ナターリャが移動すると追いかけてきて、二度三度とチップをくれる客も何人かいた。

退出するときにも、ひと工夫があった。どんっとナターリャを袖に（転ばないように気をつけて）突き飛ばすと、観客からは姿の見えない彼女に向けて拳銃を射った。

パアン！

紙吹雪が飛び散って、観客の笑いを誘った。客の興奮を最後まで引っ張っておいて、不意打ちにリラックスさせる。後の出演者のことを考えた憎い演出だった。

――チップを数えてみたら、十円札が五十五枚と百円札が十二枚。後から舞台に投げられた『おひねり』も加えると二千円ほど。一日四回の公演の合計は一万円に迫った。三倍どころか丈二とのコンビにくらべて十倍以上の稼ぎだった。もちろん、『白鳥の湖』の記録はあっさりと塗り替えていた。

美蝶も美絵もリリーも、ナターリャの度胸の良さに感心し、本郷のアイデアマンぶりを褒めちぎった。

五十鈴も皆と一緒になってはしゃいでいたが、胸に刺さった小さな棘はまだそこに留まっていて、むしろゆっくりと痛みが増してくるような気がしていた。

モダン・ミュージックシアターでの公演は、大成功裡に千秋楽を迎えた。ナターリャには、丈二が全快してコンビを組めるようになるまでの一か月を楽に暮らしてお釣りがくるだけの収入があったし、本郷もナターリャへのチップの半分を得て、またしても打ち上げ会での大盤振る舞いとなった。

五十鈴だけが、いろいろと内心穏やかではなかった。

舞台で立ち往生した五十鈴とは違って、ナターリャは不可抗力の事故で休演したのだから、本郷が打ち上げの費用をナターリャに分担させなかったのは筋が通っている。客分に甘く身内に厳しいくらいでなければ、一座のタガが緩むというものだ。

そういったこととは別の部分で。五十鈴は本郷の人間性に疑問を持った。『白鳥の湖』にしても、こんどの『女スパイ尋問』にしても、趣向が似ている。ストリップ嬢が自発的に『御開帳』するのでなく、男が強制する形になっている。さっそくに覚えた言葉を使うなら、本郷にはサドの気質が濃いのではないだろうか。

男のほとんどはサドの傾向が（当人が自覚するしないにかかわらず）あるし、女にはマゾ願望があると――これは本郷の意見だが、一座の三人も異論は唱えなかった。ナターリャは丈二との事実上の夫婦生活でも、ショーと似たような、いや、もっと激しくて淫らで、

縄や叩かれた痕が翌日まで残るようなことをしているらしい。
でも、わたしは――男の人に虐められたいなんてこれっぽっちも思ったことはない。自分で『した』のではなく『させられた』ときの安心を忘れている五十鈴だった。
五十鈴は胸に突き刺さったまま残っている痛みが、ナターリャへの嫉妬、本郷への執着だとは気づいていない。
しかし、恋愛感情とはまったく異なる過程を経て、五十鈴の想念は結局のところ本郷にたどり着く。
キャシーやナターリャの稼ぎっぷりは、『女の武器』を最大限に利用している。リリーは、大柄な身体とバタ臭い雰囲気を活かしたダイナミックなダンスが売り物だ。加えて、すくなくとも一座の誰も（ボリュームの面で）真似のできない『おっぱい挟み取り』がある。
自分から『処女』を取ったら、なにが残るだろう。それが、わからない。バレエに磨きを掛けるとしても、休み休みのレッスンでは上達は難しい。毎日コツコツと積み重ねてこその練習だ。一日休むと三日分は退歩するというけれど、最近の五十鈴はそれを実感している。
下手くそなバレエでも、これしか特技が無いのだから、バレエを諦めたらストリップは続けられない。でも、処女は……。
自分は処女を武器にしているが、それは若いからこそできることだ。二年三年と続けていたら、珍しがられるどころか気色悪がられるようになるのではないか。処女は大切にすべきものと、学校で教わり母からも躾けられているが。同時に、だからこそ女は早く嫁いで一人前になるべきだという――世間様の暗黙の了解がある。

ストリップ嬢のようなヤクザな商売を続けながら、いつまでも処女でいたら、女性として欠陥があるのではないかとさえ、疑われるかもしれない。
処女を捨てて、それからどうなるかはわからない。けれど、処女に頼っているうちは、一人前になれないのではないだろうか。一座の三人も、色気と男性経験とは密接な関係があると言っている。そして、自分にいちばん足りないのは色気なんだ。
そんなふうに、五十鈴は自分を追い込んでいった。そこに、本郷への執着が縒り合わされると――あとは、若さゆえの猪突猛進があるだけだった。
さすがに、拠点のアパートでは他人の耳も目もはばかるので。
ドサまわりの初日に、五十鈴はついに決行したのだった。

「あ、忘れ物しました。先に宿へ帰っててください」
最近は楽屋でも宿でもバレエの教本を読んで、路地裏で練習もしている。その教本を楽屋に置き忘れてきた。本郷が一日おきにしか銭湯へ行かないことを計算に織り込んでの忘れ物だった。
「夜道の独り歩きは危ないぜ」
「大丈夫です。本郷さんに送ってもらいますから」
「一雄も、いい迷惑だね。早いとこ行っといで」
リリーがネオンサインに目を向けて、そっと苦笑しているのに、五十鈴は気づかない。
これでアリバイを作ったと信じて、五十鈴はトコトコと楽屋へ向かった。
裏口でブザーのボタンを押す。三十秒ほどでドアが開いた。

「ひとりで戻ってきたのか。美蝶のやつ、不用心だな」
告白とかしたら、お子様扱いされるに決まっている。それくらいは、本郷のことをわかっているつもりの五十鈴だった。押し倒すような勢いで抱きついた。
「お……おい？！」
不意打ちを食らって、それで肉体的にも心理的にもぐらつくような本郷ではなかった。五十鈴を抱き止めて、くるりと体勢を入れ替えながらドアを片手で締めた。
「おいおい、夜這いかよ？」
冗談めかして言いながら、強く五十鈴を抱き締める。
「本郷さん……わたしの処女を奪ってください」
男の顔に胸をうずめて、五十鈴は一生に一度の言葉をつぶやいた。
ぽんぽんと、後頭部をやさしく叩かれた。
「親分に義理立てして美蝶から身を引いたのは、前に言ったっけな」
もう一度強く抱きしめてから、本郷が腕をほどいた。
「今度は、一座への義理立てだ。言ってる意味はわかるな」
三人のうちのひとりと男女の仲になってしまえば、マネージャーとして公平に振る舞えなくなる。そういう意味だと、五十鈴にもわかった。
「男女の仲とか……そんなんじゃなくても、いいです。わたし、処女を捨てたいんです」
ぺちん。頬を叩かれた。ちっとも痛くなかった。
「おまえの考えていることは、わかる」
ドキン。初めて本郷に『おまえ』呼ばわりされた。処女を捨てることしか考えていなか

った五十鈴は、胸がときめいてしまった。ささりっぱなしだった棘が消えていた。
「男に抱かれたことの有無じゃねえんだ。色気ってのは情感だ。俺は男だから、男の心しか話せねえが……寝ても覚めても、そいつのことばかり考えてる。ふっと街中で観た光景を、あいつにも見せてやりたいと思ったり。このブローチはあいつに似合うだろうと、柄にもないことを思ったり。うんと大切にして、どんなワガママだって叶えてやりたいと思う。その反面、細っこい……おまえの年頃にゃ、美蝶はもっと細かったんだ。そんな華奢な身体を抱き締めるだけじゃねえ。裸に引ん剝いて組み敷いて、嫌がろうと泣き喚こうと、ガラス細工みたいに砕け散ってもかまわねえから、存分に貫いてやりたい。そんな凶暴な想いに駆られることだってある。それが、恋ってもんだ。そのとき心に刻まれたひとつひとつが、なんてえのか熟成されて、色気になるのかな」
本郷は照れて、ぱんぱんと自分の顔を両手ではたいた。
「ずいぶんと馬鹿なことを言っちまったぜ。俺に夜這いを掛けたってこたあ、美蝶だろうとリリーだろうと、バラしちまってかまわねえけどな。今の馬鹿話だけは、内緒にしといてくれよ」
ほうっと、五十鈴は息を吐いた。憑き物が落ちたというか、見事に玉砕したというか。
本郷が言ったような恋をするまで、色気のことは忘れておこうと思った。小学一年生が、いきなり三年生や四年生の勉強を教わっても、理解できるわけがない。どうにもこうにも不出来で座長から見捨てられるまでは、自分にできる精一杯を頑張るしかない。
「宿まで送ってやるよ。ちょいと待ってな」

しばらく二人とも無言で歩いてから。
「サドマゾの性癖を男も女も隠してるってのも、前に言ったよな」
「……」
五十鈴は返事の代わりに、小さくうなずいた。
「麗華ちゃんが初めてパイパンで出演したときに、とんでもないことを言った客がいたのを覚えてるか？」
やはり、うなずく。
どうにも、小さな女の子を虐めてるようで、勃起してしまう――とか聞こえた。
「そういう性癖は、サドマゾ以上に蠟燭を買う。けど、心の奥底にそういった願望を秘めている男だって、実は少なくない。そういった客にとっちゃ、麗華ちゃんこそがスターなんだ。豊満な肉体とか妖艶な色香とかは邪魔になる。初々しくていたいけで健気で、むしろすこしばかりぎこちないくらいがいいんだ」
そうだろうかと、五十鈴は疑問に思った。
それが通用するのは、自分が（他の三人に比べて）幼く見える短いあいだだけの話じゃないだろうか。あと一年もすれば、リリーさんにもキャシーさんにもナターリャさんにもかなわないけど、それなりに女っぽくなってくる……そこまで、考えて。
ふっと苦笑した。まだ、この世界に飛び込んで、二か月だ。そのあいだに（体型はともかく）いろいろと変わっている。一年後に自分がどうなっているか、まるきり予想できない。
まずは、この公演を頑張って。それからバレエ教室に通って、リリーさんの勉強にもつ

きあって、そういった積み重ねがすこしずつ自分を変えていくのだと信じよう。男の人に抱かれることだけが、女を変えるわけじゃない。
玉砕した清々しさが、五十鈴の鬱屈を吹き飛ばしていた。

二日目の口開け。麗華の出番が終わって楽屋に戻ってくると、美蝶がきつい口調を装って、本郷を問い詰めた。
「一雄。まさか麗華ちゃんに妙な真似をしちゃあいないだろうね」
言下に否定すると思いきや、本郷が頭を掻いた。
「ちょこっと抱き締めただけで、指一本触れちゃあいねえ――と言っても、信用してもらえそうにねえなあ」
「あの……ほんとに、なにもなかったんです」
「わかってるわよ。姉さんは麗華ちゃんを褒めてるの」
「え……？」
「にじむ色香――とはちょっと違うけど、女性としてでなく女の子として、ひと皮もふた皮も剥けたってとこね。ちょっかいは出してないけど、何かがあった。そうでしょ？」
昨夜の本郷の言葉が、五十鈴自身にもわからない何かをもたらしてくれたのだろう。
「二人だけの秘密だぞ」
ますます誤解を招くようなことを、本郷が言う。
「こりゃあ、尻の三つか四つはつねってやらないことにはねえ」
美蝶は、よほど本郷を信頼しているのだろう。顔が笑っている。

そんなふたりの関係を、五十鈴は羨ましく思った。男と女の友情。少女向けの雑誌あたりに書いてありそうな言葉を、五十鈴は思い浮かべた。あり得ないことだが――もしも本郷が自分を抱いていたら、この関係は壊れていただろう。そう思い至って、五十鈴は昨夜の『突撃』を無分別だったと、あらためて反省したのだった。

白鳥麗華の変化は、観客にも伝わっていた。文字通りに現金な話だが、チップの額が五割ほどは増えたのだった。

そうなると、五十鈴にも欲が出てくる。踊りそのものは地道に磨いていくしかないし、『御開帳』にしてもすることは限られている。

五十鈴は、回転舞台での演技、いわゆるベッドショーに目をつけた。いつまでもアラベスクでは飽きられてしまう。

「これ、バレエをしてる人が見たら呆れると思うんですけど」

床でのストレッチを一座の（本郷を含む）四人に見てもらった。

開脚してうつぶせになったり、前後に開脚して上体を反らしたり。あお向けに寝て両脚を垂直に上げて（つま先が床に着くまで）勢いよく開脚を繰り返したり。

「くそお。バレエって、こんなにもエロかったのかよ」

本郷の感想がすべてを言い表わしていた。

「ったりまえだろ。バレエってのは、男女の交わりを踊りで表現したのが始まりだ。教会がバレエを禁じていた時期だって、中世の頃にゃあったんだぜ」

四十六サンチは知らなくても、踊りに関しては古今東西を問わず博識なリリーだった。

「たしか、これって小学生が最初に習うやつなんだろ。けしからんな。バレエってのは、

実にけしからん」
悲憤慷慨を裏返した表情で、本郷が繰り返す。
ステージでも好評だった。これでようやく、白鳥麗華の人気は他の三人に追いついた感があった。

レズ熱演

麗華の人気に反比例するように、観客は『御開帳』のときに、なにがなんでも処女膜を実見しようという雰囲気ではなくなってきた。ほかのストリップ嬢と同じように、女性器そのものが鑑賞の対象となったようだ。それはもちろん、ポスターから『処女デビュー』の文字が消えて『最年少バレリーナ』というおとなしいキャッチフレーズに変わったせいもあっただろうが。
六月の中頃に、スケジュールの変更があった。八月十一日から二十五日までの休みに、五日間だけの『特別公演』を入れたのだった。なにが特別かというと――
「座長たちは、いつもどおりだよな」
「そんなことはないわよ。本気で逝かせっこするからね」
「ともかく、おれっちは麗華と組むんだな」
麗華には、話が見えない。遠慮なく質問するくらいには、一座に溶け込んでいる。

「つまりだな。今度の公演ではおれっちと麗華もレズビアン・ショーをするんだ。真似っこじゃないぞ。泣いてやめてくれっていうまで、麗華を逝かせてやる」
返り討ちにできるならしてみろと、麗華を焚きつける。
「例の電蔵コンビも出るそうよ。もちろん、抜き身を突っ込むでしょうね」
場所は船でわずか十五分の距離にある小島。おもな産業は、売春。
ニッパチといって二月と八月は、どの商売でも売上が落ちる。ことに、水商売は著しい。さいわいに、その島には（花園一座には役不足の）小さなヌード劇場もあった。そこで本番ショーを打って、客を呼ぼうという目算だった。島を挙げて売春にいそしんでいるくらいだから、たいていのことは警察も黙認している。
「て、ことで。デュエットの稽古だな。いや、ベッドショーはぶっつけだ。初心でガチガチ震えてる麗華が、だんだん女の悦びに目覚めていくドキュメンタリーにするぜ」
男の人とならともかく、裸で女の人と淫らなことをするくらいで、今のわたしは震えたりなんかしない――と、内心で反発はしたのだが。
「心配するな。指は一本しか挿れないし、道具も使わねえからよ」
そうか。そういうやり方でも処女膜は破れるんだ。あらためて気づいた五十鈴だった。

バレエとロックンロール。二人の踊りをどうすり合わせるかが最初の問題だったが、これはリリーの芸達者が功を奏した。『ドン・キホーテ』の中から、快活な曲をつないで十分の長さにまとめた。踊るのは、最初の五分だけ。
麗華が下手から登場。バレエ衣装ではなく、セーラー服。ブラジャーとパンティも身に

着けていた。当時は常識だったシュミーズやブラウスは、脱ぐ（脱がせる）手間を考えて割愛している。

下校中という設定で、振り返って袖の奥へ向かって手を振ってから円形舞台まで歩く。そこで学生鞄を置いて、花道を引き返しながら踊り始める。曲想の割に緩やかに優雅に、回転を主体に舞台中央で麗華が踊る。

舞台の中央で麗華が踊っているところへ、リリーが上手から登場する。こちらは男装。といっても、背広の下は裸でネクタイだけを締めている。麗華のまわりを、ジャンプを主体にして派手に踊る。踊りながら、あれこれとチョッカイを出して清純な乙女の気を惹こうという演技。乙女は戸惑いながらも、逃げ道をふさがれる形で花道を追い立てられて円形舞台へ――と、リハーサルはここまで。

セミドキュメンタリー　ぶっつけ本番！

処女バレリーナを篭絡する男装の麗人

ステージを重ねるごとに開発されるか？

本番の円形舞台で。麗華は背後からリリーに抱き締められた。

音楽は少し前に流行った恋歌のメドレーに変わっている。

リリーの顔が横にかぶさってきて、麗華は顎を取られてそちらを向いた。

（ああっ……？！）

今さらに気が付いたけれど。これがファーストキス……じゃないと、五十鈴は否定した。

（だって、女性同士だもの）

重ね合わせた唇を割って、リリーの舌が侵入してくる。口内を舐めまわす。

「んんんん……（本気だ）」
ショーなら、観客に見えないところまで演出する必要はない。
リリーが身体をはなした。上衣はそのままに、麗華のスカートを脱がす。そして、円形舞台に敷かれている布団に麗華を押し倒した。
リリーが背広の内ポケットから、旅行用の目覚まし時計を取り出した。時刻を十一時四十分に合わせて、目覚ましの針は十二時ちょうど。二十分間のレズビアン・ショーの開幕だった。
リリーがネクタイを抜き取り、背広の上下を素早く脱ぎ捨てた。男装の麗人から豊満な美女への変身。両手を胸で組んで怯えている（いちおうは演技）乙女に襲いかかる。
麗華を組み敷いて再び唇を奪いながら――リリーの指がパンティをなぞる。最初は焦らすように鼠蹊部を。そこを何度も往復してから、いよいよ指は中央に刻まれたかすかな縦筋へ。
びくんっと、麗華の腰が震えた。
（やだ……）
最初の日に銭湯で『おいた』の真似事を教えられて。すぐには自分で試したりしなかったけれど。オナニー・ショーとかレズビアン・ショーを目の当たりにするにつれて。半分は好奇心から、半分は芸域を広げようという言い訳から、股間の上辺に埋没している蕾を刺激してみたり、乳房を揉んでみたりも――しなかったわけではない。はっきりと、快感があった。けれど、自分での『おいた』は、いくらでも手加減できた。つぎに何をするかもわかっていた。何よりも。刺激される部位への感覚に指先の感覚が夾雑物として紛れ込

んでいた。
他人の指で触れられると。刺激だけが屹立していた。快感が鮮明だった。
パンティがずり下げられるとき、麗華はわずかに腰を浮かしてリリーの手に協力した。それはもちろん、ショーを意識しての動作だったが。布の上から触れられても、これだけの快感があった。じかに触れられたら、どうなるだろう――という、好奇心ではなく快感への期待もあった。
しかしリリーの手は股間に向かわず、セーラー服の裾に滑り込む。
「もっと脚を開いて、膝を立てて」
耳元でささやかれて、これがショーだったと思い出す麗華。もどかしげに身悶えして腰を浮かして、足を引きつけながら尻を落とすと自然に膝が立つ形になった。片膝を立てて、投げ出しているほうの脚を横へ開いた。
リリーの手がブラジャーの上から乳房を揉む。そこにも純粋の快感があふれた。
「あ……んん」
小さな喘ぎがこぼれたが、観客の耳には届かなかっただろう。
上体を抱き起こされて、セーラー服を脱がされた。ブラジャーも。通学用の運動靴と靴下は麗華が自分で脱いだ。舞台の上で裸足になるのは、これが初めてだった。『御開帳』も慣れっこになっているのに、なんだか恥ずかしい。
あらためて布団の上に押し倒されて。麗華が横向きになる。間近の観客に顔を向けるのは、パンティを自分で脱ぐよりも、ずっと『勇気』が必要だった。
リリーが背後から抱きついて、左手は麗華の下から前へまわして乳房を、右手は股のあ

いだをくぐって、その中芯を愛撫する。そのすべてが、観客の目に曝されている。
麗華の中で、羞恥が快感と綯い混ざる。
「いやああ……」
半分は演技で、麗華が両手で顔をおおった。
リリーの指が、乳首と股間の淫蕾をつまんで転がして、先端を指の腹で撫でる。
「ひゃん……くううう」
自分でする『おいた』では得られない快感に、麗華が追い上げられていく。美蝶と美絵の姉妹は互いに相手を責めて同時に昇り詰めていくのだが――麗華は一方的に責められている。返り討ちになんて、とてもできない。麗華がリリーを責め返そうとすれば、身体の向きを変えなければならない。快感が中断される。
リリーは、あれこれと体位を変えることなく、背後から抱きつく形で、ひたすらに麗華を攻め続ける。
麗華はショーを意識して羞恥心を殺し、リリーの指で掻き立てられる快感を素直に身体で表現するように努めた。
これがモダン・ミュージックシアターあたりだったら、円形舞台から遠い観客には愛想を尽かされるところだろうが。この小屋は定員が三十名。五分の入りで、レズビアン・ショーが始まると、平舞台や花道にいた客も、回転舞台へ集まって来た。だからこそ――突起が次第に硬くしこっていく様子や、股間が潤いやがてぬかるんでいくところをじっくりと見せつけて、それだけでショーが成立するのだった。
果てしなく責め続けられて、じわじわと麗華は坂道を登っていたのだが。

ジリリリリリリ……

登山でいえば、せいぜい五合目（とは、リリーの言葉。絶頂を知らない五十鈴には、高みの見当がつかない）で時間切れとなった。

「ちぇええ。つぎこそは、きっちり逝かせてやるぜ。お客さん、つぎも観てくれよ」

街中の劇場ならともかく、ここでは流連ける観客などいないだろう。この島も温泉地と同じで、『観る』のは暇つぶしでしかない。

そんな客に気前良くチップをはずんでもらうために、キャシーやナターリャの向こうを張った工夫を凝らした。コンビで連携できて、しかも観客が二十人そこそこだから可能だったのだが。

ふたり並んで『御開帳』して、たとえば麗華にチップが差し出されると、リリーが学生鞄から色紙と油性マーカーと口紅とを取り出す。それを麗華が受け取って、下の唇に口紅を塗って色紙に押しつける。キスマークの横に**白鳥麗華**のサインをする。やっつけで覚えたばかりなので、字体は安定していない。

たちまちに、チップを差し出す手が何本も増えた。リリーは、*Lily Tsukamoto* と流麗な筆記体のサイン。

チップのほとんどが百円札だったから、客数のわりには大きな稼ぎになった。

割を食ったのは、二番手の電蔵・文子コンビだった。

返り討ちで生け捕った武家娘を手籠めにするという演出は同じだったが、電蔵は越中褌だった。本来は、これが正しい。六尺褌は、場合によっては尻端折りする庶民の下着で、武士は闘いの最中にでも簡単に用を足せるよう越中褌を身に着ける。もちろん、疑似的な

ショーでは『していませんよ』という証を立てる意味でも越中褌は不都合なのだが。
座長の予見したとおりに、今回は本番白黒ショーだった。
五十鈴は生まれて初めて、男女の交接を（舞台の袖から）間近に見た。東洋娯楽劇場で演じたときとは違って、二人は『客に見せる』こと以上に『性を享楽する』ことに重点を置いているのが、五十鈴にもわかった。アアクロバティックな体位も披露するが、すぐ次の形に変えるではなく、たとえば――正常位から文子の両脚を持ち上げて肩に担ぐ『深山』に移行して追い上げ、感極まって文子が喘ぎだすと脚を持ったまま電蔵が立ち上がって、逆さ吊りにした文子に真上からとどめを刺す『立ち松葉』。
「あああああああーっ！」
絶頂の声が劇場に響き渡る。
もっとも、本郷に言わせると。
「ありゃ、まだ八合目あたりだ。女がほんとうに気をやると、あんな可愛い鳴き声じゃねえよ」
ライオンが吼えているのかと、男をびっくりさせるそうだ。
――熱演にもかかわらず、紙の『おひねり』が三つばかり円形舞台に放られただけで、『御開帳』でのチップは坊主だった。
トリは、いつものように花園姉妹のレズビアン・ショー。リリーと麗華のコンビとは違って、互いが互いを追い上げる迫真の演技ではなく艶戯だった。双頭の張形をほんとうに挿入し合って、どちらがタチ（男役）でどちらがネコ（女役）ということはなく、責めると同時に責められるという、男と女とでは不可能な、女同士の淫美な交わりだった。五十

鈴は本物の交合よりもよほどにショックを受けたのだが。それ以上に。
「私生活を舞台に持ち込みやがって。しょうがねえな」
本郷が（おそらく麗華に聞かせようとして）漏らしたつぶやきに驚かされた。と同時に。
（ああ、やっぱり……）
姉妹の仲の良さとか、ふとした拍子に見せる微妙な狎れなれしさが、ストンと腑に落ちた思いだった。私生活でのレズは、美蝶さんが男役なんだろうなと想像を逞しくして、ひとりで赤面した。
――その日の四回の公演では、五十鈴が『開発』されるということはなかった。愛撫されると気持ちいいし、股間の肉蕾をしごかれると、甲高い悲鳴を抑えられない。目覚ましのベルが鳴ったあとには、何枚もチリ紙を使わなくてはならないほどに濡れていた。けれど。シャキッと立ち上がって『御開帳』を始めるのだから、つまりは五合目止まりだった。
ひと晩寝て。朝の光の中で、昨日の舞台を思い出して。ようやく、五十鈴は嬉しくなるような羞恥――というものを感じた。性的な戯れで乱れた姿を男性に見られるなんて、思い出すだけで顔が火照ってくる。けれど、その火照りが心地よかった。肉体的な意味での『女の悦び』ではなく、精神的なそれ――だった。

二日目の公演中に、ひとりの娘が楽屋を訪れた。娘――すでに少女ではないが、性熟した女性とまではいいきれない。
「白鳥麗華さんて、いらっしゃいますか？」
麗華の顔を見るなり。

「やっぱり白川さんだ。そうでしょ？」
五十鈴にも、どことなく娘に見覚えがあった。厚化粧ですぐにはわからなかったが。
「もしかして……北野ユキさん？」
即日採用社の世話で就職した、同郷の娘だった。
「ここでは美冬で通ってます。白鳥麗華さんと同じですね。白川さんて、バレエダンサーになるって聞いてたし、ポスターがなんとなく似てたから」
素ッピンの五十鈴とポスターに描かれている白鳥麗華とは、ずいぶんと印象が違う。それでも、夜行列車に乗り合わせた北野ユキと目の前の厚化粧の娘ほどには違っていない。
五十鈴は壁掛け時計で時刻を確かめた。つぎの出番まで一時間とすこしあった。
「すみません。ちょっと出てきます」
この島で働いているのなら、いろいろと話しづらいこともあるだろうと、五十鈴は気を利かせたのだった。といっても、土地勘はない。ユキが喫茶店に案内してくれた。喫茶店とはいっても、夜にはアルコールも出し、ポン引きまがいのこともしている。昼は閑古鳥が鳴いている。この島で売春に絡んでいない商売は、アリバイ用の土産を売っている店くらいのものだろう。
喫茶店のマスターは、ユキの素性を知っていた。
「おや？　まさか口開け前のデートってわけでもなさそうだね」
「やあねえ。こちら、本番レズビアン・ショーの白鳥麗華さん。あたしの同郷で同期なの」
あからさまに紹介されて、五十鈴は顔を赤くした。と同時に。ユキは自分の娼売を恥ずかしく思っていないのだろうと、考えた。『見せる』と『させる』とでは大違いだが、どち

らも世間様に後ろ指をさされる職業なのだ。
アイスコーヒーを頼んで。それがすぐに二つ、テーブルに置かれて。五分は沈黙が続いた。先に口を開いたのはユキのほうだった。
「麗華さんが羨ましいな。いろんな所へ行けるし。お客さんがチップをはずんでくれるんでしょ」
月に一度の巡業は、たいていは地方の都市だし、観光地でも『夜の』と頭につくような場所ばかりだ。
「月のうち半分はお休みなんでしょ。あたしらなんか、生理休暇もろくにもらえない。一人も客を取らなくていいのは、正月三が日くらいかな」
身体を張って稼いでも、半分は店に持っていかれる。前借の返済もあるし、外で客に行き会っても恥ずかしくない格好を調えるのに洋服代も馬鹿にならない。何につけ、店に出入りする業者から買わなければならないので、そこでもぼったくられている。
「やめたくたって、前借を返すまではやめられないし。それがちっとも減らないし。まあ、なんだかんだと贅沢しちゃう自分が悪いんだけどね」
「わかってるじゃないか」
暇を持て余していたマスターが、カウンターの向こうから割り込んできた。
「美冬ちゃんはストリップ嬢を羨ましがってるけど、けっこうしんどいんだぞ。休日が多いたって、遊んでるわけにゃいかない。稽古だってあるし、ストリップの演し物も自分たちで工夫するんだろ？」
話を振られたので、五十鈴は控えめにうなずいた。

「衣装代とかレコードとか。それと、これはうちの一座だけかもしれませんけど、マネージャーを雇っていて、みんなでその給料を出しているんです」
「でも、そうできるだけの自由があるじゃない。あたしらは籠の鳥だもん」
「それは、こちらだって一緒だ。喫茶店をやめたら食ってけない。それを言えば、サラリーマンだって、そうだ。会社を辞めて、つぎの就職先が見つかったとしても、また新入社員の身分からスタートだぞ」
職業がどうこういう問題ではないのかもしれない――と、五十鈴は思い当たった。ユキさんの事情は知らないし詮索するのは失礼だけど。わたしは、とにかく月に一万円以上を返済しなければならない。もしかすると、ユキさんは前借といっても、月々に幾らとは決められていないのだろう。むしろ遊郭では借金を膨らまさせて、それでいつまでも女郎さんを縛りつけておく。そんな話を聞いた記憶がうっすらとあった。
「わあってるわよ。女工さんなんかにゃ絶対にできない贅沢な暮らしをさせてもらってるんだから。だけど、女郎なんてそう長くできるもんじゃないし。先行き、孫に囲まれてのんびり日向ぼっこなんてできそうにないし。刹那的で享楽的っていうのかな。自己嫌悪ってやつよ」
もしかすると、自分と同じかそれ以上の事情があって、進学を諦めたのかもしれない。五十鈴なら思いつきもしない難しい言葉を使っている。
「ごめんね」
ユキが五十鈴に向き直って、ちょこんと頭を下げた。
「思いもかけずに知り合い……て程じゃないけど、見知った顔に出会って。でも、愉しい

おしゃべりができる境遇でもないし。ちょこっと愚痴っただけなの」
もうすぐ次の出番なんでしょ。そういって、ユキは伝票を持って立ち上がった。
「これ、あたしの勘定にしといてね」
伝票をマスターに押しつけた。
なるほど。ちびちびと無駄遣いをして、それが積もっていってるのだと、五十鈴は納得してしまった。割り勘にしようとは、五十鈴は申し出なかった。それは、精一杯に膨らんでいる風船に針を突き刺すようなものだと、そんな気がしたのだった。
しかし。北野ユキとの短い再会は、五十鈴に自分の生き方をあらためて考えさせる契機にはなったかもしれない。そこからどういう結論が導き出されるかは、あたかも酒の熟成を待つように年月とはいわないまでも時を要するのだろうけれど。

三日目の公演の初回。リリーとの九回目の交わりで、ついに麗華は絶頂を体験した。
全身に快感が充満して、それが肉体を超えて広がっていくような不思議な感覚だった。自分という存在が消失するように感じられた。
「いやあああああ……恐い……やだあああああっ！」
ライオンの咆哮ではなかったが、たいていの男が女から引き出す（幾分は演技混じりの）可憐な鳴き声でもなかった。
「九合半……て、とこかな。残りは男じゃないと埋められないかな」
とは、リリーの言葉だった。ちょっとした『おいた』程度なら、女同士のほうが簡単に結びつくし、互いにツボを知り尽くしているから七合目八合目までは容易に辿り着ける。

けれど、最後の詰めは男でないとできない――と、これはリリーではなく、私生活でも姉妹で睦み合っている美蝶の言葉だから、説得力があった。
「本気で男に入れあげてちゃ、身も心も疲れちゃうけどねえ」
疲れるというより束縛されるのではないか。電蔵と文子、丈二とナターリャの関係を身近に知って、五十鈴はそう思わないでもなかった。

羞恥心から得られる悦び。これが自分には欠けていたのだと――次のモダン・ミュージックシアターで、五十鈴は痛感した。彼女自身は、何かが変わったとは自覚していない。けれど、『おひねり』の数が、白鳥麗子の成長を雄弁に語っていた。
もしかすると、あんな場末のいかがわしい劇場へわざわざ出張ったのは、自分への教育の意味もあったのではないかと、あえて尋ねたりはしなかったけれど、五十鈴は後で思い当たりもしたのだった。
ストリップ嬢として成長した五十鈴は、休暇のあいだは熱心にバレエ教室に通い、公演期間中も寸暇を惜しんで独習を続けて――小学生ではなく中学生のコンクールに出場できるくらいの技量にはなった。ただし、参加することに意義があるレベルではあったけれど。

開膜記念

白鳥麗華が花園一座に定着して、ストリップ嬢としての日常が緩やかに流れていった。その気になれば、客演を迎えなくても香盤はじゅうぶんに埋まる。演し物としては――美蝶か美絵の日舞、リリーのダンス、麗華のバレエ。姉妹レズビアン・ショーに加えて、男装の麗人と清楚な乙女の絡み合い。客演や共演に応じて、調整する。

本郷のマネージメントで、きっちり月に二か所の公演と十日の休み。

闇金融会社への返済も順調に進んでいる。

いつまでも、この生活を続けていきたいと、五十鈴は思うようになっていた。それが無理なことはわかっている。座長姉妹が現役でいられるのは、せいぜいあと五年かそこらだろう。そして、リリー。五十鈴だって、どれだけ頑張っても二十年で『嬢』ではなく『小母さん』になってしまう。けれど、五十鈴くらいの年齢の少女にとっては、五年先のことを具体的に考えることはできない。小学校の六年間だって、中学の三年間だって、いつまでも続いていたように思える。

とにかく。いつまでも今が続いているうちに借金を返し終えて。その後のことは、そのときになって考えよう。そんなふうに――悪くいえば怠惰に日々を過ごしていたのだが。

「すまねえな。親分から帰って来いと言われちまった」

本郷がマネージャーを辞めるという。正確には、菱口興行という芸能事務所の中で、花園一座の担当を外れて、総括責任者に抜擢されたのだった。

「大手のプロダクションからやり手を引き抜いて、任せきりにしてたのが失敗だったな」

顔を利かせて、事務所が抱えるタレントをあちこちに売り込んで、事務所を大きく成長させてくれた。そこまではたいしたものだったが。税務署向けと菱田組向けと二重の裏帳簿を作って、稼ぎの三分の一は横領していたのだった。

「トウシロウがヤクザを騙して、無事に済むはずがねえ」

指を詰めさせたりドラム缶でセメント漬けにしたりはしなかったものの。身ぐるみ剥いだうえで、娘は海ではなく風呂に沈めて、トウの立った女房は山奥の工事現場に送り込み、息子と当人は海の上（遠洋漁船）だという。五十鈴は家族に同情はしたけれど――ヤクザを憎む気にはなれなかった。悪いのは、男だ。一生懸命に頑張って、銀行から融資を断られて仕方なく闇金融の高利に手を出してしまった父よりも、百倍は罪が重い。逆に考えれば、闇金融はヤクザの百倍もあくどいということにならないだろうか。

そんなふうに考えてしまうのは、本郷もヤクザの仲間だからだ――とは、さすがに五十鈴も自覚している。

「ま、しょうがないねえ」

美蝶が、サッパリと言った。

「一雄はずいぶんと尽くしてくれたし。親分だって、一銭にもならないのに事務所の名義を貸してくれてたんだし。言ってみれば、ようやく乳母日傘から出て、花園一座の独り立ちってとこかね」

「いずれは、あんたが向こうへ戻るんじゃないかって、おれっちらも青色申告だの互助会の付き合いだの、こちゃこちゃ勉強してるから――ま、あんたみたいに愚連隊相手に喧嘩を売るような真似は控えとくけどな」
わずか七か月間の付き合いだった。その短い日々を振り返って、五十鈴は感慨に耽った。本郷がいなかったら、デビューで挫折していたかもしれない。一度は処女を奪ってもらおうと思い定めた男でもあった。
「だけどね。挨拶だけは、キッチリしていってもらうよ」
美蝶の言葉に、本郷がきな臭い顔をした。
「どっちへだよ？」
「麗華に決まってるじゃないか」
突然に自分の名前が出てきて、五十鈴は面食らった。
「女から夜這いを掛けた男が、何もせずに目の前から消えたとあっちゃあ、いつまでも尻尾を引きずるだろ」
そこまで言われても、まだ意味を呑み込めない。いや。かつては惚れた腫れたの仲だった女性が、その男に他の娘を抱けと言うなんて、信じられなかった。
「麗華にゃ悪いけど、あたしの都合でもあるんだよ。あんたが一雄に抱かれりゃ、ほんとに綺麗サッパリ、一雄への未練を断ち切れるってもんさ」
そうか。本郷さんが美蝶さんに未練を残してるのはなんとなくわかっていたけど、美蝶さんも同じだったんだ。五十鈴は納得した。
寝ても覚めても、その男のことを想ったりはしていない。甘えてみたいとも、あまり思

わない。ちょっと、おっかない。逞しい身体に抱きすくめられたいとも、まして組み敷かれて優しく虐められたいとも……たぶん、思っていない。処女を破ってもらうなら、この人に――という思いは、たしかに残っている。けれど、他に素敵な男性が見当たらないという環境のせいが大きいと、自分では思っている。

彼に抱かれて、それで美蝶さんに嫉妬されるとか、それはないだろうと思う。心の中と言葉とが違っているような人ではない。だから、むしろ……断わったら、それを根に持つ人でもないだろうけれど。ギクシャクするんじゃないだろうか。

「そんなに考え込まなくても、いいのよ。思いつきみたいなもんだし。相思相愛でも結ばれずに別れる男女なんて、世間にゃゴマンといるんだから」

女の一生の大事を、そんなに軽々しく考えないでほしい――という反発は、生まれなかった。本郷がナターリャの相方を務めていたときに感じた胸の痛みを、今でも思い出すことがある。それは本郷への甘えでもあると同時に、ナターリャへの嫉妬だ。本郷に抱かれることで、そういった、美蝶のいう尻尾を清算できるのではないだろうか。

「ひとつだけ、本郷さんにお願いがあります」

五十鈴は心を決めて、本郷の顔を正面から見詰めた。そして、羞じらいを含んだ笑みを作った。

「リリーさんに言わせると、九合目半から上は、男の人でないと駄目だそうです。きっと、頂上まで登らせてくださいね」

本郷が頭を抱え込んだ。おどけているのではなく、本気らしかった。

「生娘をいきなり昇天させろってか。無茶言うねい」

美蝶が、本郷の肩をどやしつけた。
「根っ子は心だって、ずいぶん昔に言ってたっけね。麗華を女にするのと一緒に、一雄も男になりな」

その日のうちに、二人はホテルに投宿した。戦前からあった連れ込み宿とか、戦後に勃興したアベックホテルなどではなく、かつては進駐軍の将校が定宿にしていた高級ホテルだった。二人の風体（本郷はともかく、五十鈴は訪問着のような服を持っていない）を見てフロント係はいい顔をしなかったが、事前に電話予約を入れてあるので断るわけにもいかない。本郷が芸能事務所でなく菱田組の名前を出したから、なおさらだった。

五十鈴の初体験について、あれこれ書き連ねるのは野暮というものだろう。

本郷は、リリーにも花園姉妹にも負けない熱心さで、指と舌とを駆使して五十鈴を追い上げ、九合目半まで登り詰めたところでとどめを刺した。じゅうぶんに潤い興奮していた五十鈴には、破瓜の痛みよりも、思い定めていた男に貫かれる悦びのほうが大きく、ついに頂上まで達したのだった。

そうして。本郷が去って初めての、モダン・ミュージックシアターでの公演。
すっかり手垢のついた『最年少バレリーナ』の惹句は、派手に書き換えられていた。

白鳥麗華（花園一座）開膜記念公演

主役の麗華は二回の出番。口開けのバレエと、トリのレズビアン・ショー。

チュチュに身を包んで袖で開演を待ちながら、麗華は一抹の淋しさを感じていた。処女を捨てて文字通りに脱皮した姿を、初めての男に観てもらえないという。

けれど。だからこそ、この舞台に意義があると思い直す。

いざとなれば助けてくれるマネージャーは、もういない。これからは、一座に助けられ一座を助けながら、自分の足だけで歩いて行くのだ。

開幕前のアナウンスが終わって場内の照明が薄くなって。劇場いっぱいにミラーボールの光点が流れていく。

三分に編集した『キューピッド』の曲が始まった。

白鳥麗華は舞台の中央へ駆け出て瞬間的にポーズを決めると、曲に乗って踊り始めた。快活に、可憐に、そして――意識せずともにじみ出る色香で観客を魅了しながら。

ストリップ嬢：完